

琉球大学学術リポジトリ

第7回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30515

初七日
存在感

東恩納るり

鮎川みのる

第7回

びぶりお文学賞
受賞作品集

琉球大学

第七回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第七回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集 目次

小説部門受賞作

初七日

東恩納 るり 6

(法文学部・国際言語文化学科四年次)

小説部門佳作

ロール

植竹 亜紀子 38

(人文社会科学研究所・博士前期課程(修士)二年次)

ブルータスの歌

迫田 祐樹 80

(理工学研究科・博士前期課程(修士)二年次)

チャボ

夢月 七海 114

(法文学部・国際言語文化学科二年次)

詩部門受賞作

存在感

鮎川 みのる 142

(法文学部・国際言語文化学科四年次)

詩部門佳作

二十一世紀のシャットダウン

安里 和幸

146

(法文学部・総合社会システム学科一年次)

てぶらぶら

上間 美香

152

(法文学部・国際言語文化学科四年次)

虹の歌

外田 さし

158

(法文学部・国際言語文化学科二年次)

選評

小説部門選評

164

詩部門選評

172

選考経過

177

琉球大学びふりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」「育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。

装丁
上村
豊

小說部門

小説部門受賞作

初七日

東恩納 るり

こんな本を思い出す。

男は十日の間、不思議な夢を見る。その、六夜だったか七夜だったか……——船の話がある。どこに着くかもわからない、洋上の巨大な豪華客船だ。

目線を上げると、彼女は黒い枠の中で笑っている。いつまでも彼女は笑顔のままだ。着慣れない喪服とハイヒールで一歩踏み出すと、ありんこより真黒な短い参列ですら、ふらふらしてバランスを崩しそうになる。ほら、言わんこっちゃない。

木くずみたいな香をつまんで、礼をする。付け焼刃の所作でも震えてやれば様になった。

乗ってあれば良かったのだ。たとえ何処に着くとわからなくとも。惰性で乗船しておけば、少なからず港だか大陸だかに到着できただろうに。それが彼岸であろうと此岸であろうと、途中下車の水死よりはまだマシだ。「友情では死ねない」と笑ったやつが、何故私を残して逝くのか。

後悔しても、もう遅い。手を掴めなかったのは私なのだ。

参列から逃れて、小さな式場のホールへ出た。外には季節外れの台風が近づいていて、風がごうごう吼えている。こんな天気海面を覗こうものなら、その気はなくても真つ黒の海中に引きずり込まれてしまうだろう。

わかりきった答えも、今となつては全てがIfだ。もし、異変に気付いていたなら。もし、声をかけていたなら。もし、声を上げていたなら。

もし、もし私が彼女の手を繋いでいたのなら。

後付けの可能性はいつだって美しく私の過去を着飾ってくる。

夜には雨がばらつくだろう。明日の朝には上陸するという台風にそなえて、私はそのまま近くのスパーへ向かうことにした。

あまり耳慣れない額をレジのお姉さんがにこやかに言つて、久々に諭吉が漱石に化した。こんもりとレジ袋二つ分の食糧は保存のきくインスタントが主流だ。それに、雑貨や買い忘れてた歯ブラシとゴミ袋、チューハイは合計二ダース。試してみたかった果実酒と、大好物の梅酒を合計五本とカップの泡盛を三つほど。ハイボールだけでもう一本。レジ袋を両手に持つて、学生アパートの自室まで運ぶ。

一日も出てたわけじゃないのに、薄いアルミの鈍い輝きが妙によそよそしく見えた。中に入っ

てもそれはそのまま、見知らぬ空気感に天井を見上げると巨大な何かがドールハウスでも覗くようにこちらを見ている気がして気持ち悪かった。

冷蔵庫はそっけなく汚い。野菜の居場所のない野菜室に次々と購入した酒が補充されるので、ここはもはや酒蔵である。インスタントにラーメンが多いのは私の趣味。飽きないように様々なメーカーの味噌ラーメンを買い込んだ。

収納が終わってみると、どつと疲れがおしよせた。野菜の存在に目を瞑れば、おつまみも多々あるので、二週間は軽く籠城出来そうな勢いである。

スーツを脱いで、テレビをつける。

もう動ける気がしない。

部屋着に着替えて、風に乱された髪のまま、冷蔵庫からチューハイを取り出した。手始めはカロリーオフから。つまみ代わりのラーメン菓子の封もあけたら、私はもう動かない。

風呂も髪もどうでもいい。

明日は日曜、何はともあれ台風上陸前に葬儀が終われて良かった。文系の私からすれば、二十余年も形を保っていた人体が、呼吸を止めただけですぐ腐りだすといったメカニズム自体理解しがたい。だが、彼女の肉がだんだんと腐敗してゆく姿を見させられるのは酷だろう。私が喪主なら食うかもしれない。

とめどない思考もこれでお終い。ブドウ味のチューハイを一息に飲みこんだら、爽やかな苦みが喉へシユワツと駆け下りた。

◆
こんな本を思い出す。神は三日の後に復活し、人々の前に姿を現した。およそ人間技ではないことを堂々とやつてのけるから、きつとそれは「主」であろう。

本島に直撃した台風のせいでは足止めを食らったのは私だけではないらしい。彼女は三日前に見た薄幸そうな笑顔とは違う、生々しい動きで部屋に上がる。学生アパートの一室、日当たりの良い角部屋は、彼女にとつて居心地の良い間取りなのかもしれない。

閉め切った私の部屋は三日前の雰囲気のまま梅酒の香りが加味されて、彼女のまとう白檀の匂いとその甘さに清廉さを上書きする。切なさに似た香りが充満しているせいか、何故だか私は彼女の顔が見られない。

飲んで食つてのレトルトな生活を三日も続けた部屋は、他人を上げることが出来ないくらい汚くなっていた。換気扇だけが二十四時間勤務で働いて、ゴミ箱に積まれたレトルトの残骸と遊びで積み木にしたチューハイ缶のピラミッドが墓標みたく立っている。

水道のバルブをきゅつと締め、彼女は濁った酸素を吸った。

そしてついたままのテレビの前へ白いハンドバックを置き、手始めとばかりに食卓の菓子袋を片し出す。すらりと透き通った細い指が、長年叩き込まれた手際に沿つてするとゴミを袋へ送るのは一種の魔法に似ている。つまみを片付け、カップ麺の中にティッシュを入れて同じ袋に放る。一連の作業の中になにか魔術的な魅力さえ感じてしまうのだ。

見たい。見ていたい。

そう感じて酔いもほろろに身を乗り出すと、自分の建てた空き缶ピラミッドが胸に当たった。まるで制止されたかのように、またそこから動けなくなる。きっちりとした境界、カミサマが決めた線引きを、私は越えることが出来ない。

「何本？」

ぬるりと伸びた白い腕が眼球へと近づいて、私はとつさに身を引く。呆れたような声が濁った空気にまた響く。

「何本、あけたの？」

「……1ダース」

「飲み過ぎ。つて、梅酒も空いてんじゃない。計十五本」

すうつと消え入る声は、耳を澄まさないで聞こえない。完全に酔いつぶれてしまえば、私は彼女の言葉をしっかりと聞き取ることが出来るだろうか。

完璧な手際でピラミッドが暴かれる。指定の燃えないゴミ入れを片手に、黙々と作業は続く。

重力なんて関係なくせに、彼女の髪は動きに合わせて左右に揺れ、薄っぺらい蛍光灯の下では白い肌が妙に綺麗だ。

「大丈夫、そっちのひらべつたいのはウイスキー」

「アルコール度数高！ 野菜嫌いが早死にする気？」

懐かしい声は、二日酔いを酔いでつぶした脳に降る。彼女はため息と共にはき出すと、裏の成

分表をいちいち確認していた。早死にしたのはそっちだろ、という反論も今は出来ない。

「そうかも」

ぼつり、あふれない涙で視点の焦点は合わず、ただただ時間だけが濃密に熟成されてここにある。酔いが醒めたらこの幻覚も消えるなら、私は死にたい。ただそれだけなのだ。

「友情なんかで死なんですよ」

南の島に特有の、のんびり訛った言語で、彼女は生前とおんなじように返してくる。ああほら、だから飲んで良かったんだ。

「やだよ。先に私を置いてった阿呆のゆるーことなんて聞かない」

「悪いと思ってるから、来たんじゃない」

カリン、最後の空き瓶が袋で鈴のように鳴る。彼女は茶道の仕草みたいに優雅に身を起こす。じゃあなんで。

放置していたスマホの白さが目に痛い。スマホに付けた安いガラス玉は青く輝いて、それがやたら目に刺さる。彼女は何食わぬ顔で台所へ袋を寄せた。無菌室みたいに真っ白なこの部屋で、私の怒りだけが青く煮える。コントロールされた感情はどこまでも青くて、馬鹿みたいにははき出せない。

「じゃあ、なんで死んだの」

にじんだ声が、何とか喉から絞り出され、彼女の背に向かっていく。当たり前前の無言。私の聞きたい言葉、だけを選択し並び替える、陳腐な駆け引きの時間。

だって幽霊なんかいない。酔っ払いの夢だ、こんなの。初恋の人が夢に出て、乙女を抱いて囁くような、聞きたいことだけを教えてくれる、そんな自己満足なのだ。

「そうね」

思考して、ちよつと困ったように呟く。聞きたい私の単語が、彼女の口から出るのを期待してない。矛盾しているけど、私はこれが彼女だと信じたい。

「そう、でも……だあめ、教えない」

軽やかに焦らし、彼女はひらりと矛先を変えた。隣に腰掛けて私のスマホを奪う。

「……何、してんの？」

「データフォルダ。……わあ、かわいい！ すごい、これ全部ノラの子？」

ぱつと開いたそのフォルダは、私が撮った動物の写真だ。実家にいるバグのコロッケとマンチカンのトウフ以外は、だいたいノラか動物カフェでの戦利品だ。

「わあ、トウフちゃんとコロッケちゃんもいるー！」

お互い犬も猫も比較の出来ないくらい大好きで、よく一緒に県内のアニマルカフェに出向いていた。彼女は楽しそうに、私のスマホを弄っている。白い指がつうつと液晶画面の表皮をなぞり、慣れない手つきでパネルを撫でる姿は生前より生々しい。

「ふふ、かわいい」

上機嫌で画面を見つめる彼女はどこまでもマイペース。気づいた時には話題の賞味期限が切れていて、尋ねようにも恐怖がそれを許さない。私のスマホで遊ぶ誰かを見守るのはどこことなくシュールだ。プライベートな精密機器は、彼女に知られたくない思いと知って欲しいという相反した感情で、荒れ狂う私をよそに規則正しく綺麗に動く。

「これで、おっけ」

さらりと言った彼女がスマホを置いたのはその後だ。何をしていたのか聞き出す勇気を私は持ち合わせていない。顔すら見られない臆病な友情は、しつとりと時間感覚を押し殺して成立している。彼女はなめらかに立ち上がる。

「それじゃあ、そろそろ行くわ」

幽霊のくせに真っ直ぐとした足取りで、彼女は収納スペースに向かう。

何をするのだろう、と酔った脳で眺めていると、彼女は鶴がそつと奥へ隠れる時のように襖を開けて中へ入った。

「決して中を見ないでくださいね」

にこやかに笑って言う彼女。

「明日も来るの？」

場違いな質問は彼女の返答の資格を得ない。

「中を、見ないでくださいね」

茶の湯の主人が現れるのを逆再生したみたいな、馬鹿丁寧な所作で彼女は襖を閉めた。ぼつん

とした静寂が出先から帰ってきて、後は期待してもそこから彼女が現れることはない。もちろん、物ぐさな私は襖を開ける事などしないから、鶴も思う存分居れば良い、と期待していた節もある。



こんな本を思い出す。子ども向けの都市伝説を集めた本だ。塾でバイトをしていた時に、夏休み中の子どもらに話すため何気なしに読んだ。そんな都市伝説の中に、確か「模様替えおばさん」というのがある。家主の外出中にどこから死に神みたいなおばさんが現れ、家を勝手に模様替えする。家主が不振に思つてカメラを設置すると、その老女が映つており、家主の帰宅直前、物置の中に隠れる。家主の真後ろ、物置の中に草刈り鎌を持った老女が潜み、うっすら開けた扉から家主を観察していますよ、という筋書きだ。現代の妖怪はカメラ写りまで気にしてくれるので世界はどこまかしこもIT社会だ。

翌日昼、スマホの履歴に着信があつた。そこで異変に気がつく。

スマホから、彼女のデータが一扫されていた。アドレスから電話履歴、写真やメールの送受信ボックスまで全てだ。やられた、と思つてももう遅い。昨日のピコピコで消されたのだろうか。

だとすれば、あれは現実だと言う証拠になる。

もう一度会えないものか。期待が半分、文句が半分で曖昧な気分だ。そんな時だった。突然軽やかな流行のテクノが流れて、私はとっさにスマホを落とす。床に当たつて滑つたスマホは

しばらく気の急ぐ音を流していたが、私が再び手に取れるようになったのは留守番登録が終わってからだった。

仲村渠だった。死んだ彼女と私は小学校、仲村渠は中学からのつきあいで、休んだのを気にしたようだった。留守番を確認しようとした手が、なにかの間違いで電源ボタンへ向かう。気づくと電源が切れていた。持った手は震えていた。

何故か、むしゃくしゃする。

指定できない憤りは私を酒に誘った。アルコールを浴びるほど飲めば、私は彼女の元へいけるだろうか。今からなら遅くない、銀河鉄道なら同じ便に乗れるだろう。四日目の酒はもはや水と同じで、そろそろ体中の体液全てがアルコールに変わっている頃合いだ。そしたら人はホルマリオン漬けみたいに、死んでも肉は腐るまい。

夜になっていた。時計が十二時を過ぎ、日が翌日に変わっても眠らなければ今日は今日のままである。横になって、床に置いた目の前のチューハイ缶を眺めていた。汗のようなしずくが、冷たい缶の表面に滲み出している。美味そうだという感覚ももはやない。単純作業と化した飲酒では、味もコクも全て欠落した。

来てはくれないかと期待している。昨日のあれが幻覚などではなく、本当に彼女の靈魂が訪ねて来ていたなら、私はどんなに嬉しいだろう。ぐるぐる螺旋に渦巻く脳を、何気なしに缶に当てた。滲んだ結露の汗が、体熱を緩やかに冷ましていく。風邪でもないのに、続く頭痛と薄ら寒さが何

故か心地よい。

「ん」

軽く体を転がすと、自製の利かない四肢が缶を転ばした。くると踊るように倒れたチューハイは中のアルコールを踊るように振りまいてころころ転がる。あーあ、もつたいない。自分の失態に小さくため息をついて、私はティッシュを探す。こんな時だから見つからないものだ。

起こしかけた身をゆっくり戻す。横になつて眺めればすると酒がこちらへ向かつて来た。頬に冷たい爽快感。何気なしに舌を出す。舌先ですくうように、泡立つそれをなめた。こぼれたチューハイが味覚を刺激する。していることは同じなのに、どうしようもない罪悪感を感じるのは何故だろう。小さく笑うと動きに合わせてこぼれた酒に波紋が出来る。睫毛についた雫が眼球に入らないよう注意して拭き取り、後はすることもないのでそのまま仰向けに寝転んだ。髪の中にまで進軍する発泡酒はどことなく退魔的だと考えた。

「ああもう、もつたいないなあ」

軽やかな声に、目が覚める。

昨日と同じ仕草で、彼女はまた部屋に上がった。ハンドバックを昨日片付けた食卓に置くと、風呂場からタオルを持って来た。そこで溜まった洗濯物を見たらしい。責めるようにタオルを差し出すと、すぐさまテレビまで転がったチューハイ缶を捕まえる。

「まだ残ってる？」

私が伸ばした手を避けて、彼女はそれを一息に飲み干した。こくんこくんと白く細い喉が鳴る。ビククリして眺めていても反論の言葉は思いつかない。

「仕返し」

「閻魔大王に知られたら地獄に落とされるぞ」

「いいよ、別に。どっちにしたって近々行くんだし」

素っ気なく返ってきた答えに、それもそうかと納得する。

「それよりも、早く風呂行きなさいって」

飲み干した缶を台所へ片付けに向かった彼女を見て、私は喪から帰って一度も風呂に入ってなかったことを思い出した。

四日ぶりの風呂は流石に爽快だ。未だ居座る酔いと風呂上がりの湯気でふわふわする。彼女は私の散らした酒を拭き終えていた。部屋に散乱したゴミやお菓子の袋、目に入るものは全て整頓され、年始以来活躍の無かったモップが久方ぶりの仕事を終え、ペランダに干されに出て行った。こう見ると、足場があるというのは良いものだ。掃除をしなくなったのはたった四日前の事なのに、こうも早く汚れてしまうものなのか。

「少しは片付けなさい」

「すみません」

モップを干し終えた彼女に平謝り。部屋の掃除全てを任せてしまったのには些か罪悪感が残る。なんとなく居心地が悪くて、私は部屋の隅っこに座った。泡盛のカップは忘れない。

「ねえ、部屋は住む人の鏡なんだって」

唐突に話しかけてきたのは彼女の方だ。度の強い泡盛をちびちび飲みながら、私は耳だけ彼女に向ける。

「汚くて足場のない部屋は、その人の心に余裕がないってことなんだって」

伝聞形式の彼女の言葉は、なんだか読み聞かせの絵本の様に心地良い。うつらうつらしながら、私は彼女の掃除を見守った。彼女は本の整頓を始めていた。並びが適当だったコミックスを整頓させ、教科書や参考書、文庫本を背の順に並べている。綺麗に整列していくそれらは、見ていてどこか心地よい。

「原因は、私？」

すうつと透き通る声に、小さく目を開ける。

彼女の手は止まっていた

「うん」

それはちよつとした仕返しだ。

「ふふ、正直で結構」

月の終わりに本屋へ行くのが好きで、私達はよく近所の古本屋さんへ行つた。本の匂いは心地よく鼻をくすぐって、無理に押し込まれた本と、平積みにされた本の間を歩くのが大好きだ。

同じ理由で、大学図書館も意味なく通った。そういえば、彼女と出会ったのも小学校の図書館だったわけ。

「気にしてたの？」

「柄じゃないよね。でも、心残りってやつ」

一冊一冊、一緒に買った本はゆつくりと、知らない本はタイトルを眺めて片付けるので、彼女のペースは遅くなる。私はと言うと、彼女の言葉の続きが気になって、なんだか胸がそわそわした。酒は辛みより甘みを感じるようになったらお終いだ。後は病気になるまで飲むしかない。それで良いと、思ってしまう。

「ねえ」

すうっと、彼女のシルエツトがこちらを向く。

私はとっさに目をそらす。

「お願いだから、友情なんかで死ななくてよ」

後ろめたさはいつものこと。だからこそ、返事なんか出来るわけがない。友情で死ぬ価値はないと彼女が言うのなら、何を理由としたら自殺が許されると言うのだろう。私にわからないそれを、彼女は知っているのか。

「愛なら良いの？」

ぼつり、聞こえるか聞こえないかぎりぎりの声。彼女の口元がゆつくりと歪む。小さく息を吐くのは、呆れた時の彼女のクセだ。

それでも、もうかまわない。

「愛情だったら、良いの？」

臆病な私はやっぱり彼女の瞳を見ない。言ってしまったって後悔の訪れた格好のつかない告白は、お子様じみた駄々っ子だ。壊れてしまいたくて、残りの泡盛を飲み干した。いじらしい焦燥感が漂うから、私はずっと落ち着かない。

「いいんじゃない、後悔さえしないなら」

そっけない言葉は、意外にも私自身に突き刺さった。否定して欲しかったのか、行き場のない不思議な感情で頭がぐらぐらする。

「それならいいんだ」

返答にすらなっていない独り言は寂しいだけだ。

「後悔しない自信があるなら、やってみなさい」

どくん、脈打つのがわかる。突然に鼓動を思い出したのか、心臓はドクドク血液を回す。怖い、と感じた。そんな風に言ったのではないし、彼女は怒っているわけでもない。でも、彼女を初めて恐ろしいと感じてしまうのは、彼女の後ろで手招くその世界のせいだろうか。

彼女は彼岸の人間で、私は此岸の人間だ。

忘れていた訳じゃない。でも、その重みは死んでからじゃわからない。

「私は、後悔したよ」

ほつりと続けられた言葉に、糸が緩む。目尻がにじむ。泣いてたまるかと思唇を噛んだ。「だから、あんたは後悔して欲しくなくて、ここに来た」

背中はずいぶん遠い。距離も、こんなに遠い。だって私はそちらに行きたいのに、まだ恐れが彼岸へ向かう足を躓ませる。現実に戻されるのも怖くて、仲村渠からの手引きすら拒む。

どっちつかずは私の方だ。

「なんてね」

はつと、そこで彼女の瞳を真つ直ぐに見つめた。

深い茶に彩られた瞳孔の中に、私がすっぽり収まっている。

「ほんとは、私もあなたにこっち、来て欲しい」

嗚呼、捕らえたのか捕らえられたのか。

畏にかかったのは私の方だったのか。

にこやかに笑う白い頬は、無邪気な毒だ。私を蝕む甘い毒葉だ。その言葉にイエスと頷きたい衝動と、恐怖に駆られた心臓が早鐘を打つ。バクバク鳴る心臓が苦しい。

「友引、って知ってる？ 運がなかったね、台風……来ちゃってさ」

名前くらいなら知っている。本来それを避けるはずが、台風の影響で期日が遅れに遅れることになり、それでは困ると彼女の両親が強行した。私も、特に気にはしていなかったが、参列の何

名かが嫌がるようにそそくさと出て行つたのを覚えてゐる。

「連れてつてもいいよ、つて言われたの。神様が、約束だからつて。本当はその気もなかったんだけどねえ。私も、否定しきれなかったから」

彼女が私を選んだわけは、きつと私と同じだ。

「私を連れて行こうと思つたの？」

「うん。連れて行く一人なら、私はあなたを選ぶ」

重力の影響下にはない彼女は、風もないのに衣服が揺れる。なだらかな動作で立ち上がつて、ゆつくり浮いた。歩く必要なんてない、それなのに今まで人間らしさを演じていた。彼女はもう人ではない。

「ねえ、いこつか」

しゆるしゆると彼女だけが近づいてきて、恐怖だか歓喜だか知らない感情が私をその場に縫い止める。冷ややかな笑みは歪に顔に張り付いて、ぬつと私の目の前に顔を伸ばした。幽霊の目を見てはいけない。そのはずなのに、私の両眼は彼女を捕らえて離さない。

白い指がそおつと頬へと伸びてきた。甘いのか辛いのかわからなくなつた泡盛のカップが転げ落ち、金縛りになつた私を置き去りにした。酔いの回つた頭じゃ、迫り来る死すら甘い匂いを知覚する。

「うそ」

彼女の掌は、私の頬には触れられず、すつと透けて壁に入った。

「半分だけ、うそ」

結局目をそらすことが出来なかった私を尻目に、彼女は生前よろしく柔らかく笑う。そして、昨日と同じように押し入れへ。

答え合わせを望む私を尻目に、彼女は彼女として、神様からの難問に向き合った。

「私は、いいよ」

背中にかけて言葉は、確かに本心だ。でも、その中の恐れまでは隠せない。くるりと風見鶏が回るように振り返った彼女は、幽霊でもなければ神様でもない。私の大切な人だ。

「だあめ、まだ、連れて行かない」

冗談めかして応えようと、昨日と同じように襖を開けて、中へ入った。

「ねえ、明日も来るよね？」

「いい？ 中見ちゃ駄目だよ」

私の声をかき消すように言い放った彼女は、制止もむなしく閉まる襖の奥へと消えた。



こんな本を思い出す。愛しき人を運命の悪戯で奪われ、道に迷う男の話だ。男は地獄に墮ち、ウェルギリウスに救われ、旅に出る。地獄を巡る長い長い旅だ。もし、仮に私が同じ立場であるとして、

地獄の層のどこかで彼女を見つけたなら、きっと立ち止まってしまふだろう。そこから動けないのなら、人も悪鬼も地獄の死者等と大差ない。

今日は、朝にカツ麺を食べた。台風之恩恵で食料は未だ大量にある。酒のストックが少なくなつて来たが、買い出しに出るのも億劫だった。それからは一日中食卓のカツ麺の残骸を眺めた。この二日で、自室は見違えるほど綺麗になつている。ほこりっぽい空気はそのままだけど、目に見える景色が綺麗だと心も清々しく晴れやかだ。

彼女は私を連れて行くために来たと言つた。望まれた死なら、甘んじて受け入れよう。だが、死の淵を垣間見ると、私はどうも臆病風に吹かれてしまふ。恋煩いと死への近親感は、似ているようで違ふものなのだろう。

「よいしょっと」

いつの間にか入つてきた彼女に、夜の存在を気付かされる。外はもう暗いのに、彼女はおぼさくくさいかけ声と共に溜まった洗濯物を干しにかかった。いつの間に洗つたのか、カゴいっぱい洗濯物は彼女の細い腕をへし折つてしまふそうで、私は思わず手を伸ばす。

「いいよ。私が干すから」

「大丈夫、あなたはお風呂行きなさい」

なけなしの勇氣はさらりとかわされて、会話らしい会話もそれっきり。ここ二、三日人間らしい生活をしていなかったせいかな、毎日の入浴さえ忘れていた。自分の衣服を軽く嗅いで立ち上るアルコール臭に、もっともだと私は風呂場へ向かった。

髪についた水滴をタオルでばさばさやっていたら、彼女が干し物を終えたようで、押し入れから何かを取り出す音が聞こえた。洗面所の鏡では、屈んでもこもごもやっている様子しかわからない。「何、してるの」

「お掃除」

それは見ればわかる。彼女が押し入れから出してきたのは、小中の頃、私と彼女と仲村渠の三人でやっていた交換ノートだ。それに、同じクラスになった時の文集と卒業文集も数冊ある。思い出に浸るような年でもなくせに、彼女は取り出した文集を膝に乗せて楽しそうに眺めている。ふと、疑問が残った。

「どうして私の部屋を掃除するの？」

この三日間、彼女はこの部屋の掃除を続けた。初日は私を叱咤し、昨日は私を連れて行くと脅した。その真意がわからない。私に死んで欲しいのか。それも友情での死は嫌だという。では、彼女の言う愛とは何か。

私はもう、その「愛」がラブでもライクでもかまわない。どっちだって行き着く先が同じなら、その二つに大きな違いはない。では彼女はどうか。彼女の欲する死の意味を、私は知りたい。私の問いかけには興味を示さず、文集を眺めたまま言葉が返る。

「だってほら、ここがあなたの死ぬ場所になるから」

あまりに現実味のない真実は、笑えない冗談と同類だ。だからこそ、彼女は淡々と言い放つ。ページをめくる紙の音が、部屋にゆっくり染み入る。

「最後までらい、綺麗に死んでおきたいじゃない」

それもそうか、と納得するほどのイージーな答え。文集を眺める茶色の瞳と、瞬きをする長い睫毛は言葉の意味を奇妙に美化して発声した。

「それだけ？ 本当に？」

「それ以外、何があるって言うの？」

試すように、こちらを茶色の双眼が捕らえる。深い茶色の海に、私と私の部屋は完全に飲み込まれてしまっていた。彼女は本質を多く語らない。何をして欲しいのか、何をすべきなのか、それを個々に委ねる。典型的いい子だが、だからこそ彼女の中核にたどり着けない。そのミステリアスな言動に、私の気性と仲村渠のお節介は多分気があっていたんだと思う。

「本当に、私を連れて行くの？」

今日の私はお喋りだ。彼女は開いていたページに指を這わせ、そのまま一息に破り去る。それがあるに自然な動作だったから、私も止めるのを忘れて眺めていた。

「本当だよ」

彼女の嘘は、わかりやすく伝わりにくい。

真面目な顔でぴりぴりと紙を破く。白い掌で劣化した紙がはらはら崩れていくのは、まるで命の巡りの終わりを眺めているようでもあった。

「うそでしょ」

「どうして、そう思うの？」

言葉とは正反対の、楽しいな表情。正解は柔らかに部屋を満たした。私は答えに困って、彼女の向かいに座り込む。決定打はない。根拠も、特にわからない。でも。

「なんとなく」

そ、なんとなく。

そうとしか表現できない何かで、彼女の言葉は満ちていた。

死の世界の住人なのに毎夜尋ねて来たりとか、生きろと願うくせして死んで欲しいと望んだり、あるいはその気もないのに愛だの恋だの語るの、理性よりもどちらかというと感性に根ざした言語で彼女が会話するからだ。

ならば、私の返答も感性からの言葉であつてかまわない。

「なにそれ」

「あたりでしょ？」

「半分だけね」

細切れになった紙は、そのまま用意されていたゴミ袋へ。降り積もった雪のように、指定のゴミ袋の底に落ちてゆく。白く溜まる紙切れは純白の死だ。止める言葉も見つからず、彼女の掃除を眺めている。慣れた手つきが、何かを確実に消してゆく。

「なんでそこまで捨てるの？」

「何事にも、必要な儀式はあるの」

そうとだけ言い、彼女は交換ノートを丸ごと袋へ入れた。消してしまうには思い出のつまり

すぎたこのノートだけは破れなかったのかも知れない。燃えるゴミと書かれた袋の中にあのノートはミスマツチで、彼女が帰ってから、後でそのノートだけは救出しようと思った。

「誰かがしないと、私があなをさらってしまふ」

その言葉はどこか、何かを思い詰めたように響く。でも、その言葉の真意が私には伝わらない。ふんわり、指が踊って食卓に置かれたカップ麺へ向かった。優しい笑顔。まるで、何かを諭すように、彼女は柔らかに微笑んでいる。

「ねえ、ついて行ってくつて、こういうことだよ」

白く細い指が、カップ麺を絡め取る。中のスープは不意に持ち上げられて器の中で踊った。何を、と眺めた瞳がその動きを察して小さな悲鳴を上げる。芸術的な動きで、そのカップは交換ノートの入った袋に向かっていく。

「や……」

「だあめ、見なさい」

重力に任せて、茶に澄んだ液体が香ばしい匂いと共に袋へ散乱する。紙は突然の汁気にまみれても、何食わぬ顔で冷えた味噌スープを吸っていた。私の悲鳴は、喉の奥で立ち止まったまま、その発声の行き場を失っている。

「こういうことなの」

確認するようにもう一度だけ入って、彼女は袋を台所へ片付けて襖へ向かう。もの悲しさに動けない私を置き去りにしたまま、彼女だけ時間が進んでいく。確かに、汚したのだ。私の生が、

彼女を汚した。喉の奥に張り付いたままの悲鳴すら、途方もない悲しみの海では無意味だ。

「よく考えて。あと、開けないで」

吐き捨てるようにそう言っ、彼女はいつもよりちょっと乱暴に、襖の奥の闇へ消えた。私だけ、この真っ白な部屋に取り残されたままだ。



「遅い」

時刻は真夜中の二時をとつくに過ぎ、テレビのチャンネルも放送休止に入っている。スマホはあれから電池が切れて、充電されることもなく傍らで力尽きていた。

ここ数日、彼女が来るのを楽しみにしていた。何、と言うほどの確信もないけど、今日も来る気がしていた。わくわくの反面、昨日の映像がまだ脳裏に焼き付いている。思い出はあつさりゴミへと変わった。また勝手に掃除されてはかなわないと風呂にも入った。選択は揺れ動くけど、まだ片足が踏み込めずに彼女を待っている。酒も、残り二缶。食卓に用意した。遅い。

「もう、来ないのかな」

そもそも彼女は本当にいたのだろうか。携帯のデータは消え、文集も交換ノートも捨てられた。彼女の生家に行けばいいのだろうか、彼女の死を再認識させられるのはつらい。そもそも本当に迎える来るのか。

底知れない恐怖はある。だけど望んでもいる。

どちらとも言い切れない曖昧な情感に、私自身が翻弄されている。

酒が入っていないのが悪いのかも知れない。二日酔い——と、この場合も言うのか知らないが、飲み過ぎによる頭痛でこれ以上飲む気も起きない。このチューハイは、死ぬ時の為に取っておくのだ。死の間際の苦しみや徒労は、流石に恐ろしいことだ。

じつと部屋に体を横たえていると、テレビの横にある押し入れが目に入った。昨日も、一昨日も彼女が消えた場所だ。絶対に見るなと言うそこは、地獄の底にでも繋がっているのだろうか。開けてみればわかるのかも知れない。

この四日間、抱いたこともない好奇心が、頭痛と吐き気を押しつけて私の心臓をかき乱す。眺めた部屋は、この四日ですいぶん様変わりした。彼女が来るから昼夜は逆転し、その生活拠点である居場所は見違えるほど綺麗になった。

ただ、あのよそよそしさだけが感じられない。

死後への近親感とは、こんな感じだろうか。改めて眺める自室を、棺桶だと彼女は言った。連れて行く。その「一人」に私は選ばれた。誰も知らない彼女との奇妙な逢瀬は、確かに私の生き甲斐だった。

だが、それを証明する手はずがどこにある。

彼女は幽霊だ。ただ、私を連れ去るだけの幽霊だ。

私が死んだらそれはきつと自殺でも他殺でもなく変死だろう。何もなしに死ぬのかと思うと、

やはり怖い。でも私が死ぬことでこの奇妙な愛は完遂される。私がそれに殉じるのだ。

なのに。

「遅い」

押し入れからの気配はない。それどころか、どこにもおかしなところはな。飲み過ぎによる気分の悪さか、姿を見せない彼女への苛立ちか、それとも他の何者かもわからない感情は行き場もなく私の鳩尾でぐるぐる回る。

彼女の痕跡は、もうこの世にはないと思われた。

嗚呼、彼女の両親は、形見分けだか掃除だかにかこつけて、彼女の存在を必要最小限にまで片付けてしまおうだろう。いやというほど知っている、彼女の綺麗好きは、何を隠そう親譲りなのだ。

あるいは、綺麗なのがいけないのだろうか。

綺麗だから、彼女は掃除に来ないのか。それなら汚してしまおうと思っても、私は昨日のシーンがよみがえって動けない。彼女の幽霊が片づけたという証明であるこの部屋を、これ以上私は汚せない。彼女の生を、なかったことにできない。幽霊になって会いに来た彼女が、四日間片付け続けた部屋。私だけしか知らなくとも、私だけが知っている彼女の仕業なのだ。

不要な思考はから回る。そして、回った車輪は苛立ちを加速させる。

そっちがその気なら、私から出向いてやろう。

やめておけ、という理性に頭痛と吐き気を押しやって、私はのらりと立ち上がる。目的は決まっている。ただ、あの押し入れを開ければいい。そうすれば、鎌を持った彼女がいて、模様替えの

結末に私を連れて行ってくれるのだ。

恐れに後ろ髪を引かれても、運動を始めた肉は止まらない。ゆつくりとした足取りで、一歩、また一歩。安い学生アパートの自室は、そんなに苦勞せずとも目的地へたどり着いた。いけないことをしているわけでもないのに、罪悪感が身にしみる。手を伸ばす。そして、横に引く。

そこに。

やっぱり何もない。

恐れていた現実も、求めていた何かもなく、そこは彼女が片付けて一人分くらいが屈んで入れるスペースと、白いリモコンと、冬用の毛布が押し込まれていた。

ああでも、ほら、もう少し足りないのかも。彼女はここの襖を閉めた。そうだ、あの通りにするのだ。

小さな居場所に屈み、すつと前を見据えると二つ並んだチューハイの向こう、私がいつもいる場所が見える。手を揃え、彼女のしていた所作を思い出す。

「誰も、見てないから、早く来なよ」

思いのほか声は震え、ゆつくりと閉まる襖から漏れる光が薄くなる。暗闇がだんだんと濃くなつて、私は真つ暗の中に体育座りで閉じこもる。何か、生暖かい香りがする。お線香の香りに似た押し入れの匂いは、どことなく落ち着くのに、心臓だけがばくばく言っている。

早く来て。

そう思つて、じつと目をつぶつて待つた。部屋を四日ぶりに包んだ静寂が、私の周囲を取り囲んで、それが無性に怖かつた。



眠つていたらしい。背中に当たる毛布の感触と、異様な暑さに目を覚ます。何も考えず襖を開けると、むあつとした熱気が顔に当たつた。気分の悪さに息苦しさが追加されて、どうもおかしい。暑い。いや、熱い。いやな胸騒ぎがする。いつの間にか消灯された部屋で、焦げ臭いのが鼻につく。混乱だけが先走つて、あたりを見渡しても真つ暗な中にごうごう鳴る音が耳鳴りみたいに響いて来るので動けない。

「火事だ！」

声は、どこからともなく聞こえた。外だろうか。それとも隣？

切羽詰まつた声。ああ、私はどうすればいい。立ち上がろうにも、身体が硬直して動けない。汗がたらたら頬を伝う。この部屋には酒がある。きつとよく燃える部屋だ。私もアルコール漬けた人間だから、仲良く一緒によく燃える。そんな無駄ばかりは考えるのに、肝心な体を動かすことができていない。

「火事だ、逃げろ！」

同じ声が、また聞こえた。逃げろつたつて、どこへ？

ここはアパートの二階だ。しかも角部屋で階段までかなり距離がある。私は彼女に導かれる甘美な死を妄想していた。だが現実とはこんな物だ。彼女は結局酒が見せた幻覚で、私はこんなところで焼け死ぬのだ。痛い、熱いと言いつつながら、全身爛れて無残に死ぬ。

恐怖に疎んだ足が、何とか立ち上がっても、悪酔いした足がもつれて扉に向かってそのまま倒れた。直に打った胸が痛い。ああ、駄目だ、無理だ。死ぬぞ。死ぬ。死ぬ。

ここに来て、怖い。痛みも死も、全てが怖い。死ぬのが怖い。

「うろう、うろう」

唸るようにして、泣きそうになった。馬鹿みたいだ。

幻覚を信じて、逃げ遅れて。痛い思いをして死んで。

涙が滲み出して、嗚呼、もう動けないと諦める。

瞬間だった。

「何をしている、逃げろ！」

「！」

首根っこを、持ち上げられそのまま玄関へと押し出される。勢いがついた身体が扉につくまで数秒とかならなかつた。ひんやりとしたアルミドアの内鍵を無理に回し、汗をぬぐって肩でドア

を押す、押し開けて、外へ！
早く！ 外へ！ 逃げろ！

「——っはあ！」

「うわっ！」

ゴツという鈍い音で、運悪くドア前に立っていた人物が小さな悲鳴を上げる。

外は想像以上に静かだ。熱気も救急車や消防のサイレンも聞こえない。そこは、朝日が爽やかに照らし出す久しぶりの駐車場と、スウェット姿で髪もボサボサの仲村渠の姿だった。いつもはお団子にまとめた髪も、化粧が品よく映える顔も自然体のそのまま、着の身着のままといった風だ。

「痛ったい……」

「あ、ごめ……ん」

「ってか、何その汗。我慢大会？」

「へ？」

額の汗をぬぐうと朝の風が露を帯びてひんやり過ぎた。部屋をのぞき見ると、空調が動いているのが見える。時刻は七時になろうとしていた。

「いや、あんたこそ何でこんな時間に……」

「は？ 電話したでしょ！ なんか『怖い』『連れてかれる』とか奥でぼそぼそ言ってたから、

私超びびって飛び出してきたんだけど！」

そんな電話、した覚えがない。

わけがわからずあたりを見渡していると、部屋の押し入れから物音がした。ライトを付けると、開けっ放しのはずの押し入れが閉まり、そこからリモコンが放り出されていた。去年の冬から一番のなかった、白い空調のリモコンだ。ご丁寧にも暖房の最高温度、ダッシュでかけてある。

「こんな真夏日に暖房？」

隣からのぞき込んだ仲村渠が、あきれた様に言った。

嗚呼、こんなことするのは。

「どうしたの？」

頬が、緩む。涙が止まらない。慌てる仲村渠をよそに、私は腹を抱え笑う。涙もう止まらない。泣きじゃくって顔面が崩壊した私をなだめるように、お節介屋の仲村渠は背中をさすって座らせた。ああ、泣くのはこの一週間で初めてだった。それに、今更ながらに気がついた。

「ね、何があつたの？」

仲村渠は、やっぱり優しい。夢は保母さん、優しいお母さん。言動も仕事もやさしいから、子供に好かれるし同級生にだって頼られる。男運がないのが可哀相だけど、それはそれで別に母親じゃなくても子どもを相手にする仕事がしたいと言っていた。だから、声を聴いていると落ち着く。優しいすぎる友人の声は、ゆっくりと、この四日間のしこりを取り払っていく。

こんな本を読んだ。

沖繩の葬儀についての本だ。祖母が亡くなった時、難しい沖繩の仏壇行事を執り行うため母が購入した。手伝うため、少しだけ目を通したのだ。

沖繩の仏壇行事に、初七日(しよなのか)と呼ばれる物がある。いや、日本本土でもあるのかわからないが、七日ごとに行う仏教行事らしい。その最初の七日目、死者は地獄の門をくぐるための儀式がある。それを問題なく終わらせるために人々は故人を供養するのだ。同じ漢字で「はつなのか」という行事もあるが、それは生まれて七日目の祝だ。

どうやら人は生まれて死んでの一週間に特別な意味を持ちたがるらしい。生まれての祝いと死んでの供養。似ているようで決定的に違う二つの行事は、彼女にとっても重要なターニング・ポイントであった。彼女はきつと、彼女の願いと神様に、正面から向き合った。私は幸せ者だ。こんなにも大切な人が二人もいる。どちらも愛していると、間違いなく言えるのだ。

「……笑わないで、聞いてね」

ぼつりと言って、気がついた。ああそうだ。

今日から、彼女の初七日が始まる。

小説部門佳作

ロール

植竹 亜紀子

ぼくの名前はミヤ、といつても猫じゃない。人だ。ぼくの本名には「ミ」も「ヤ」も入ってないけれど、「まーちゃん」が「みーちゃん」になって「ミヤ」。いーじゃん、どうせ猫みたいなんだからって、あるがつけた。

ある、ぼくの相方。友だちとか彼女とか家族みたいだとか、そんなふうを決められない相方。あるはわがままで凶暴で、気まぐれなのに依存症。ぼくの生活を脅かし、ぼくに寄生する奇妙な女。

あるとの出会いは一八歳。ぼくがのどかな静岡県から上京してきた一八のとき。ぼくらは大学のクラスメートとして知り合った。彼女は当時、五つ年上の銀行マン、くにいさんと付き合っていたから、同じ年なのにおねえさんぶっていた。すごく短いスカート履いて、ワカメちゃんみたいにパンツ丸見えなのに、なぜか偉そうだった。

「ねえ、大阪、行ったことある？」

ぼくが茹でたそうめんを啜りながら、あるは訊く。

「ないよ、っていうか静岡と関東地方以外行ったことない。あー名古屋なら一回だけ」

「ふーん。わたしのカレシ、今大阪だよ」

「へえー、あれっ？ 大阪の人だったっけ？」

「違うよ。でも今、一か月大阪で研修。寂しいけど、遊びに行けるからけっこうラッキー！」

「……そうだね」

あるは聞いてもいないのに、色んなことをペラペラとぼくにしゃべる。あるの彼氏はカオナシに似ている。お母さんはひどくせっかちで、お父さんは気分屋で変わり者。あるが昔飼っていた猫のメケオさんは、周りに気を遣う性格のいい猫だった。そういう「あるとその周辺」に関する情報が、ぼくのガラガラだった知識の箱にどんどん放り込まれる。

あるは自分の欲望に忠実だ。食べたいものがあれば人のものだろうとお構いなしに横取りするし、欲しいものがあれば親のカードを使い、糸目をつけず買いまくる。そして、いちばん厄介なのは、気に入った男がいたらどうにかして落とそうとすることだ。

そんなあるの行動全てが、静岡の駄菓子屋に生まれ（ぼくの父はサラリーマンだが、祖母が実家の軒先で小さな駄菓子屋をやっていた）、道に逸れることもなく、実直に日々を過ごしてきたぼくととつては衝撃的だった。印象的、じゃなく、ただただショッキングだった。そんなあるに「わ

たし、カレシいるけど、別に大丈夫だよ」と言われ何となく肉體關係を持つてしまった。しまつた……、彼氏にバレたらどうするよ？と悩んでいるぼくの隣で、あるは現在お気に入りひらやま君の話をしている。

「ねえ、ひらやま君つて、超かわいいと思わない？」

一体どの辺りが？ひらやま君は同じ学科の同級生。色白ぼつちやりと言えば聞こえはいいが、要はおデブなオタク系。そう、あるは致命的に男の趣味が悪い。甘く評価しても、彼にモテる要素は見つからない。それに比べ、ぼくは小奇麗で爽やかな細マツチョ。大学中、いや、日本中の女の子に聞いて回つたとしても、十人中、九人はぼくのほうがカッコいい、と言つてくれると思う。顔だつて、スタイルだつて。でも、あるの基準でぼくは全然イケてないそう。だつて痩せてるんだもん、つて、つまらなそうにぼくの薄っぺらの脇腹をつまみながら、そう言う。あーそーですか。別にぼくはあるに「巻き込まれている」だけで、惚れこんでいるわけじゃないから、さほどシヨックじゃない。でも、それはそうと、ぼくのほうがカッコいい、絶対そうに決まつている。そんなオタク系に「だつて、あんた彼氏いるでしょう」つて振られ、あるの小さな恋は終了。残念！

ぼくは浜田省吾と三国志が好きで古臭い若者だつたから、いつもあるにバカにされた。しつこいようだけど、あるの男の趣味ほど悪くはないと思うけど。あるはそんなぼくの部屋にあるダサイ（とあるが判断した）もの、例えばお母さんが静岡から送つてくれた柄もの下着や、英字入りTシャツなどを独断で片っ端から捨てた。ついでに中学のとき、やつとの思いで手に入

れた宮沢りえの写真集も捨てられた。かわいかったのに、ミヤザワく。でも、ぼくは「やめろ！」って言えない。気弱で、優しい男だ。お気に入りの浜省を聴いていると、「湿っぽい！」とCDを止められ、三国志は危うく古本屋に出されそうになった。

「ある、三国志ちよつと読んでみ、ちよつとでいいからさ」
あるは珍しく言う事を聞き、バラバラとページをめくる。

「ねえ、これってつまるところ、どんな話？」

「兵法の話。騙し合いとか駆け引きとか。あるも読めば、はまるって」

「駆け引きね、いい言葉」

「でしょ！ でしょ！」

「どこの話なの？」

おっ！ 何時に無く食い付きがいいぞ。初めて認めてもらえた感じ。ぼくにだって得意分野はあるんだ。

「中国だよ。昔の中国」

「ふーん、中国行きたいの？」

「うん、いつかはね。バイトして、お金貯めて、中国語も勉強してさ」

遠い目で夢を語る男。カツコいいらあくイケてるらあく。そんな夢がすぐに叶うことになるとは。

次の日、あるはいつも簡単に夢を持ってきた。

「ほら取ったよ、航空券。とりあえず上海まで」

は？ えっ？？ 唐突すぎて、事態が呑みこめない。

「H I Sの人が、早めにパスポート取ってって。わたしのはあと三年、有効期限残ってるから大丈夫」

大丈夫って……、ある、あんたも一緒かよ。いつ、中国好きになった？

中国語ってどうして喧嘩腰に聞こえるんだろう。ぼくらは上海から四川に向かう寝台列車の中にいる。「軟臥」、この列車でいちばんいい席だ。四人一室のコンパートメントには、ぼくたちの他に、かなり年齢差のありそうなカッブルがいる。その男性の方と車掌が、さきほどから大声でやり取りしている。言葉はちつとも分らないが、緊迫した空気にぼくは身震いする。

「ミヤ、あの人、大仏に似てる。おくさん？ ずいぶん若いよね。金目当てかな？」

あるいは殻付きピーナッツをポリポリ食べながら、いつも通りのマイペース。しばらくして車掌がその場を離れると、彼らはぼくたちを見て申し訳なさそうに微笑んだ。それにあるも笑顔で返す。

「ニイハオ！ だいちゃんとおくさん」

勝手に名付けてるし……。彼らは中国で話しかけてくるが、全然聞き取れない。

「ちよと まて ください」

なぜか片言風のあるは、デイバックから手帳とボールペンを取り出す。なるほど、漢字で書け

ば通じ合える。でかしたぞ、ある。そうしてぼくたちは彼らと紙の上でコミュニケーションを取り始めた。日本人が乗っていることが知れ渡り、毎日、中国人たちがとつかえひつかえぼくらの部屋にやって来た。あるは上機嫌だ。

「すみません、日本の方ですか」

トイレに行こうと通路を歩いているところ、初老の男性に話し掛けられた。

「そうです。あなた、日本語ができるんですね」

中国に来て初めて、日本語を話す人に会えてホッとします。

「はい、私は十年ほど前、京都大学で講師として働いていました」

「そうなんですか、すごいですね」

経歴の凄さに圧倒されながら、ぼくは答える。その方のお名前はニイさん。とても温厚な目をしている。

「あなたは、どちらまで？」

「終点の成都です」

「ああ、じゃあわたしと同じですね。ホテルはどこですか」

「それが、まだ決めてなくて……」

「そうなんですね、でも明日、電車着くのは夜遅いですよ。たしか十一時近くなると思いますよ」

「その時間からホテル見つけるの、むずかしいですかね」

「うーん」

ニイさんは少し考えて、答える。

「よろしければ、私の家に泊まりにきませんか？わたしは妻と子供たちと一緒に住んでいますが、長女と次女は結婚して家を出ているから、部屋はたくさんあるんですから」

「はあ、でも」

これを素直に受け取っていいものか。とりあえずあるに相談しないと。

「いいんじゃない」

あるはレバーみたいな色の平べったい食べ物、手でちぎっては口に運びながら、ポーカーに夢中になっていて、あまり取り合ってくれない。

「あ、ちゃんと考えてよ」

ぼくは不安と苛立ちから語気が少し荒くなる。中の一人が心配そうにあるをつつく。

「はい、はい、ごめんね。どの人？」

あるはめんどくさそうに右手を舐めながら、左手に持っていたカードをテーブルに伏せ、ぼくと一緒にコンパートメントの外をぐるっと見渡す。すると、ニイさんがぼくたちの乗っている車の両のいちばん後ろあたりの通路から窓の外を眺めていた。ぼくはそとと彼をゆび指し、あるに耳打ちする。

「ほら、あそこで窓の外を見てる人」

「えっ、あの眼鏡のおじいちゃん？」

「おじいちゃん、ってほどお年寄りじゃないと思うけど」

あるは目を細め、遠くにいるニイさんを凝視する。

「よゆう！」

急に勝ち誇ったようにファイティングポーズを取り、

「だって、向こうは一人だし、じいさんだよ。二人で倒せばなんとかなるって」

って、襲われること前提？

「行こう！」

あるはぼくの手を引き、ためらうことなく、まっすぐニイさんの元へ向かって行く。竹を割ったような彼女の性格が、なおさら頼もしい。

「こんにちは」

ニイさんは、あるに突然話しかけられたことに一瞬戸惑っていたが、後ろにいるぼくの姿を認めるや否や、笑顔で首をコクリとした。

「お連れさんですか？」

「は？」

ぼくはニイさんにあるを紹介したあと、できればニイさんのご厚意に甘えたい旨を伝えた。あるはさつき「倒す」と言ったことなど、おくびにも出さず、ニコニコしながらぼくらの会話を聞いている。

「そうですか、歓迎しますよ！」

旅は道連れ、世は情け。結局、ニイさんの家に滞在させてもらい、三国志の名所旧跡を満喫したあと、次に寄った長女の家からは仙人の住む山、「峨眉山」に連れて行ってもらったり、その先の重慶では次女のご主人に、長江下りの切符を地元料金で買ってもらったりと、大満足の旅となった。

二人で旅行することに味をしめたのか、あるいは面倒なことをやってくれるマネジャー的役割としてなのか、あるいは海外旅行にぼくを連れ出すようになった。日本の二六倍の面積を持つオーストラリアを長距離バスで周遊することや、タイの無人島で色とりどりの珊瑚に囲まれてシユノーケリングすることも。それから、マカオで地元のちよつと怖そうなお兄さんたちにポルトガル語で野次られながらカジノをすることや、カリフォルニアで元ロシア軍パイロットと一緒にスカイダイビングすることも。それまでのぼくの人生からは想像もつかないようなことばかり。ぼくらはアルバイトでお金を貯めては（あるいは旅のお金は自分で稼ぐというポリシーだった）、いろいろな国へ旅に出た。そうして、ぼくらしからぬアクティブさで大学生活を駆け抜けた。

「まあ、二人が決めたことですからねえ」

ぼくの父は笑顔で何度か頷きながら、あるの両親の方を伺う。ぼくの父は製薬会社の営業職、

あるの両親はお医者さん。自然と上下関係ができてしまっている。

「そうですね……、ミヤくんが一緒なら、ねえ」

あるのお母さんは隣にいるお父さんを見やる。あるのお母さんの血液型はぼくと一緒のO型。決して我を通さず、空気を読みながら生きていく。彼女とぼくはあるに巻き込まれている者同士、妙に通じ合えるものがあつた。

出会つた当初、あるが付き合つていたくにいさんは、ぼくらが大学二年のとき、ブラジル支社に転勤になつた。それから、何の約束も、告白めたことも交わしてはいないが、いつの間にかぼくとあるは付き合つてる？ みたいになつている。大学を出て、ぼくは東京の食品会社に就職し、あるは日本語教師の資格を取り、都内で外国人に日本語を教えていた。学生時代、何度となく海外旅行を繰り返し、旅の魅力にとりつかれていたぼくらは、いつしか「外国に住みたいね」と話すようになり、それが一部変化をし、アジアの風情漂う沖縄に移住しようとしていた。それで今、お互いの両親に許可をもらおうと、あるの茨城の実家にぼくの両親共々、出向いて来ているといふわけだ。

「自分のことは自分でして、あんまりミヤくんに迷惑かけないようにな」

「わかりました。ありがとうございます」

お父さんのことばにあるはしおらしく返事をする。あるはお父さんの前ではいつもの奔放さは微塵も見せず、常にいい子を演じる。一九九九年七月一日、空から恐怖の大魔王が降つて世界を支配する、そんな都市伝説に世の中がざわめき立っていたその日、ぼくらは沖縄に飛び立った。

二十六歳だった。

「いちやれば、ちょーでー」。会えば、みな兄弟。沖縄はそんなところだったから、ぼくもあるもすぐにこの温かな土地に馴染むことができた。ぼくらは週末ごとに名所へドライブに行ったり、海に潜ったり、誘われる飲み会に顔を出したりした。見るもの、会う人、全てがよそ者のぼくたちには新鮮だったし、逆に沖縄の人たちからすると、ぼくらの行動は珍しく、面白かったようだ。ぼくはお土産物の卸の会社で、あるは日本語学校で働きながら、沖縄生活を満喫し、お互い二十九歳を迎えた。あるは相変わらず、何人かのボーイフレンドとプチ恋愛のようなことをしていたようにだけれど、もともとぼくはそんなのには慣れっこで（というか、そもそもぼくたちは恋人同士なのだろうか？とも思うんだけど）、熱しやすく、冷めやすいあるは、ぼくがあれこれ心配する余地もないほどあつという間に、彼らとの関係を終えていた。ぼくはぼくで草食系男子の例にもれず、女友達とご飯やお酒に行ったり、買い物に連れ出されたり、憂さ晴らしにカラオケに付き合わされたり（おそらく彼女たちの中で、ぼくはオスとして認識されていないようだった）することも多かつたし、あるにとつての恋愛は、風邪引きのようなものだと思っていなかったから、お互いそのへんには干渉しないようにしていた。

一月半ばの寒い日だった。沖縄では旧暦の十二月八日、いわゆる大寒の日に、「ムーチー」と言われる月桃の葉に包まれた細長い形のお餅を食べる風習がある。そして、この時期の冷え込んだ気候のことを「ムーチーびーさ」と呼ぶ。その日はまさしくそんな日だった。家に帰り、会社のパートのおばちゃんからもらった紙袋の中からムーチーをひとつ取り出す。月桃の爽やかな香りがほのかに広がる。ぼくは丁寧に月桃の葉をはがし、つやつやとした薄紫色のお餅を一口ほおばった。「紅イモ味と、うっちゃん味があるからさ」とおばちゃんが言っていたから、たぶんこれは紅イモ味のほうだろう。柔らかくて優しい味がする。あるはまた帰って来ていない。ぼくはスポーツニュースを見ながら紅イモ味を食べ終えた。もうひとつたべようかな、でもあるが帰るまで待とうかな、などと考えているうちに、うつらうつらし、いつの間にかソファアで寝入っていた。

「……ねえ、ミヤ、ねえ」

気付くと、あるが隣にいた。

「あ、寝ちゃったつけ。おかえり、今何時？」

あるは黙って携帯を差し出す。ディスプレイは一時二十五分を指している。

「ずいぶん遅かったじゃん」

「……うん」

あるの様子がなんとなくおかしい。

「どうした？」

暗がりによつと目が慣れてきた。寒いせいか、あるの頬つべたは赤らみ、その黒目がちの目は心なしか潤んでいる。

「だから……、困った……ってわけだ」

あるは何やら言いにくそうにしている。

「うん?? 困ったって、何が?」

ぼくは眠気をこらえ、切り返す。

「タマ、が……」

たま、たまつて? ああ、あるの教え子の台湾人。一度、会ったことがある。大学時代のひらやま君を彷彿とさせる色白ほつちやりオタク系。

「タマに……」

たまに?

「タマにコクられた」

タマニコクラレタ? 寝ほけた頭に入って来たことばのかたまりをうまく分析できない。ゆつくり、確認しないと。

「あるは」

「うん」

「タマつて、あの台湾の若い彼のこと?」

「うん、十九歳」

「コクられた、つまり告白された」

「うん」

「って言ったの？」

「ご名答」

あるは某クイズ番組の司会者よろしく、右手で握りこぶしを作り、それをほくの顔に近づける。

「ある、すごいな。十歳も年下じゃんか。あんたの守備範囲の広さよ！」

素直に感心してしまう。

「よくないことよ、このことは、きつと、よくないことなんだ」

遙か一点を見つめ、呪文を唱えるようにあるが呟く。ぼくたちは今年の誕生日で三十歳を迎える。一つの区切りというか、年貢の納め時といおうか、いつのまにか付き合っているようになっていたぼくらは、なんとなく流れで結婚しようかということになり、つい二週間ほど前のお正月にお互いの両親や親戚にその意向を話し、帰って来たばかりだった。

「で、あるはどうするの？」

「どうもしない、べつに付き合ってっていうわけじゃないし。ただ、想いを告げたかった、って言われただけ」

「ふーん」

なら、よかった。修羅場はぼくの性に合わない。でも取り立てて言わなくてもいいようなことを報告されたことに、少なからず違和感を覚えながらその日は眠りに就いた。

その予感が的中したと分かったのは、それから三カ月ほど経った春先のことだった。あるは三月の末に、例のタマが大学進学のため東京に引越すのを、茨城への里帰りも兼ね、手伝いに行っていた。あの告白以来、あるはしばらくタマと距離をおいていたが、そのうち時々会うようになっていたようだった。ぼくはあんまり面白くはなかったけれども、いつもの病にマリッジブルーが加わり、ちょっとこじらせてしまっただけだと、いつものように熱が引くのをしばし待とうと思っていた。

ぼくは東京から帰って来るあるを出迎えに、那覇空港に来ていた。まだ春休み中のせいか、空港は家族連れや学生たちで賑わっている。ぼくは少し離れたところに、トボトボ歩くあるの横顔を見つめ、慌てて呼びとめる。

「あるー！」

あるは立ち止まってキョロキョロする。そして、ぼくの姿を認めると、顎の右下あたりで控え目に手を振りながら、ゆっくりとこちらに向かって来た。明らかにテンションが低い。

「ああ、ありがと、ありがと。遅い時間にごめん」

らしくない気遣いを見せながら、あるは左手に持っていた小さな千疋屋の紙袋を差し出す。

「何、これ？」

「マンゴープリン。羽田空港限定らしい」

「ああ、そう、悪いっけね」

何だか様子がおかしい。あるは今までぼくにお土産を買ってきてくれたことなんてない。あつたとしても、せいぜいあるが食べかけたせんべいぐらいのものだ。それが千疋屋だなんて。

「ミヤ、あのさー」

きたか。

「やつば、家に帰ってから話す」

あるは言いかけたきり、黙りこんでしまった。那覇空港から北谷のアパートまでの三十分が永遠のように感じる。

「きれい……」

ドアを開けるなり、あるの口から言葉が漏れる。ぼくは元来、きれい好きだ。出したものは元の場所に、散らかしたなら片付ける、汚れたところはすぐ掃除。几帳面は母親譲りだ。それがあがるが、ものは出しっぱなし、部屋も散らかし放題、そのうち何が何だかわけがわからなくなり、ぼくまで「ある側」に引き寄せられていく。だから、あるがいないときは思う存分、部屋の整理整頓に専念するのだ。きちんと整えられた清潔な部屋は気持ちがいい。何より、外から帰って来た時の幸せ度が格段に違う。

「お風呂も掃除したよ。タイルの間に口ウを塗ると、水を弾くからカビが生えないんだって。だから塗つといた」

「口ウ?」

「蠟燭のロウ」

ぼくは掃除道具の入った白い箱の中から短くなつた蠟燭を取り、得意げにあるの目の前に差し出す。

「ふーん、すごいねミヤ」

あるは熱のこもらない賞賛で応じる。

「それはそうと、ちよつと座つて」

あるは二人掛けのソファアの左側に腰掛けると、右半分の真ん中あたりを軽くたたき、ぼくを促す。出た！「座つて」。

あるがこういう時は、決まつてあまりいい話にはならない。ぼくはそわそわしながら、指定された位置に座る。

「ミヤ……、あの、さ」

あるはじつとぼくを見据える。次のことばを続けようとする度、あるの円らな瞳に涙が溜まつていく。やがて、その目に満たされた涙はまあるい粒となり、左右の境目あたりに零れ落ちる。何度見てもこの泣き顔には、いちいち心が締めつけられる。

「ある、どうした？」

ぼくも泣きそうになる。

「ごめんね……、ほんと、ごめん」

「だから、どうした？ ごめんね、だけじゃわかんないよ」

胃の奥のほうがキリキリと痛む。なんとなく察しはついている。でも、決定的なことをあるが

口にするまでは信じていたい。何も、変わらないと。

「うん、……だね」

あるはテーブルの上のティッシュボックスを箱ごと抱え、そこから一気に五、六枚を抜きとり、思いきり涙をかむ。

「わたし、タマ、のこと……好き、なっちゃった。タマ、不慣れな土地で、一人、ぼっちで、不安で、……だから、わたしが、守らなくちゃ、いけない。初めて、こんな、気持ち、なったの」
あるはしゃくり上げ、とぎれとぎれながらも言葉を紡いでいく。今までは違う、そんなことぼくだって分かっていた。一生懸命なんて性に合わないと言っていたあるが、タマのためには必死だった。何でもあけつひろげなあるが、タマへの想いだけは直隠しにしていた。いくら常識から逸脱したあるでも、先生と生徒、十歳の歳の差、そして何より、ぼくたちが結婚に向かって進んでいることを気にしたんだろう。慣れない気遣いをさせてしまったと、妙に気の毒になった。「ミヤ、のことは、大、好き。ミヤは、わたしの、家族……以上、の人。ずっと、一緒、いるから、何でも、分かって、くれている」

気付くと、ぼくも泣いていた。あるが抱えている箱からティッシュを一枚抜き取り、それで鼻をつまむ。

「でも、何となく、こんな感じで、今まできちゃって、いつのまにか、付き合ってる、みたい、なって……、それで、結婚しよう、みたい、なったけど……、何かそんなん、違う、かなって」
あまりにも的を射ていて、二の句が継げない。

「タマはさ、わたしが、いなくなるの、不安って……。必要、とされてる、そんな、感じ。今まで、無かった。何となく、いつも、ある程度で、人と付き合って、って。ミヤ、だって、私、じゃなくちゃだめ、な、わけじゃない……。きつと」

「……そんな、ことないよ」

ぼくの言葉は空しく宙に浮いて消える。言葉が先か、想いが先か。いずれにせよ今のぼくには、言葉も想いも行く先を失っているように思える。

「マジ??」

イズミはバーカウンターの中からぼくの方に身を乗り出す。彼女はぼくらと同年年で、北谷で小さなバーを経営している。そのバーが、ぼくのアパートの部屋の真下にあつたことと、彼女がぼくたちと同年だったこともあって、ぼくもあるもイズミと仲良くしていた。

「うん。でも、あるがそういうんだから、仕方ないよ」

あの後、あるは出ていった。五月に一緒に行く予定だった結婚式の下見はキャンセルし、お互いの両親には、結婚する日が延びただけ説明した。ぼくは込み入った事情を上手く説明できる自信がなかったし、心のどこかで、あるが戻って来るような気がしていたのだった。

「サトーくんは、自分の意見ってないの?」

すこしイライラしながら、イズミはぼくに問う。

「うーん、ずっとこんな感じできちゃったからさー、あると出会ってから、もう……、あつ、十二年だ！ 千支一周したね！」

「千支一周って、……でーじ、のんかーなんだけどー」

イズミはわざと大きなため息をついてみせる。そうか、もう十二年も経つんだ。ぼくはずっと自分のことを絵にかいたような平凡な男だと思っていた。けれどもこんなに長い間、あのあると、他から見たら考えられないような感じの付き合いを続けてこられただけ相当変わってるよ、とみんなから言われる。でもぼくは何が「標準」なのかわからないぐらい、感覚はマヒしてしまっていた。

日曜日、朝六時に目が覚める。好物のスティックスナックを齧りながらじつくりと新聞を読む。あるがいないと、朝からペアストレッチをさせられることも、苦手な人參ジュースを「全ての食品の中でいちばん優秀なのよ、人參は！」という講釈付きで無理やり飲まされることもない。掃除もあるに邪魔されない分、驚く程はかどる。お昼前にスポーツクラブで小一時間泳ぎ、ランチを兼ねてマンガ喫茶に行く。ビックコミックスピリッツと少年ジャンプの連載に一通り目を通し、好きなマンガ本を二、三冊読み返す。そのうちちよつと眠くなり、家に帰って昼寝をする。起きるともう日が暮れていて、ぼくはテレビを見ながらビールを飲み、小腹が空いた時には、パスタを茹でて食べたりして、十時頃には床に就く。毎週ほぼこんな感じだ。あるがいないと、あちこち連れ出されたり、振りまわされたりすることもない。ぼく一人で過ごす休日はとても穏やかだ。

でも、何かが足りない。一卷きロールケーキに詰められたクリームが、すっぽりと抜け落ちてしまったような、そんな感覚。あるはどうしてるかな。あれ以来、電話もメールも一切ない。

あるの具合がよくないらしい、そう教えてくれたのは、沖縄に来た当初から付き合いがある和美さんからだった。あるは和美さんのことを実の姉のように慕っていた。

「メニエール病っていう病気なんだって。耳の平衡感覚がおかしくなる病気。ずっとめまいがしてるみたい。ストレスが原因じゃないか？」

ぼくは久しぶりに和美さんから連絡をもらい、一緒にご飯を食べに行った。和美さんの話によると、あるは家を出ていったあと、タマのいる東京には行かず沖縄に残った。そしてそのまま仕事を続けながら、遠距離恋愛をしていたということだった。本当の事は分からないが、タマが大学に入った直後、彼の父親が経営していた会社が倒産した。そのため、学費や生活費が払えなくなつた父親に代わり、あるが正規の仕事に加え、バイトもし、彼に仕送りをしていたという。そしてあるは今、生活費節約のために国際通りにあるゲストハウスで生活しているということだった。それを聞いたとき、あまりにもロククな状況に尊敬すら覚えた。

「ゲストハウスって行ったことあるか？ 一つの部屋に二段ベッドがズラッと並んでるわけ。プライバシーなんてないさあね」

ぼくはその状況を思い浮かべてみる。

「あんた、心配じゃないねー？」

「そりあ……、心配だよ。でも、あるから全然連絡もないしさー。邪魔するのも悪いかなあって」
「あいつは馬鹿な女だよ、ほんとに。あんな若い台湾人、どこがいいのかサツパリわからん。金吸い取られて、しかも暴力までされてさー」

「えっ、金？ 暴力？」

「どんよりとした不安に襲われる。」

「はあー？ ホント、なんも聞いてないねー？」

「うん……」

和美さんはぼくの反応にうろたえた様子だ。

「とにかく、本人から聞いてごらん。あんたたち、別れたっていつでも相当長いんだからさ。あいつも強がつてるけど、心細いはずよ」

というわけで、ぼくはあるの職場の前に来ている。ここで、あると例の彼が出会ったと思うと、心がチクツとする。そーつと中を覗き込むが、扉は黒いガラス張りになっていて、中の様子がよく見えない。

「あらっ、お久しぶりー！」

後ろから急に声をかけられ、驚いて振り返ると、あるの先輩の女の先生が立っていた。誰だっけ、この人？ 確か……

「ヨナ、ミネ先生？」

「はい。名前、よく覚えてくれてましたね」

彼女はほくの心を見透かしたように、クスツと笑う。

「ええ、まあ……」

ほくは覗き込んでいたことを見られた恥ずかしさも手伝い、居心地が悪くなる。

「彼女、中にいますよ。呼んできましょうね。ちよつと待つててくださいね」

ほくがことばを挟む余地もなく、彼女はビルの中に消えて行った。ほどなくして、中からあるが出てきた。あるはほくが見たことがない、生成りのワンピースに淡いピンクのカーディガンを羽織っている。顔がげつそりしているせいかな、ドラマやアニメに登場する病弱な女の子のようなイメージだ。

「あ、ミヤ、久しぶり」

「うん、久しぶり」

半年以上ぶりの再会なのに、ほくらは特に盛り上がるでもなく、挨拶を交わす。

「ある、元気だった？」

「……まあまあ」

「そう。電話もメールもないからさ」

「うん、電話もメールもしてないから」

身も蓋もないあるの言い方に一瞬ひるむ。

「今日、何時まで？ 晩メシ行かない？」

「あんま、食欲ない」

食べるのが大好きなあるが食欲が無いとは、明らかに緊急事態だ。

「だめだよ、食べなきゃ。そうだ、しゃぶしゃぶ食べ行こう。ある、好きじゃんね。仕事終わるまで、車で待つてるからさ」

あるは生キウイソーダーをチビチビ飲みながら、スライスされたエリンギを昆布だしが入った鍋の中に入れ、さっきからずっとシャブシャブしている。本当に食欲がないみたいで、箸は一向に進まない。ぼくは頼んでしまった手前あとにはひけず、無理をして二人分を平らげた。

「ある、最近どうよ」

「ゲップをこらえ、聞いてみる。」

「……さいきん、特に」

具の入っていない鍋がグラグラと煮立っていて、声が聞きとりにくい。ぼくは、IHコンロの「切」のボタンを押す。

「あー、そのー、タマとは？」

あるは二、三秒間を置いてから、口を開く。

「タマ、とは、別れ……」

語尾がフェードアウトしていく。

「何？　なんて言った？」

「別れた。少し、前に」

「あー、そーなんだ」

どう返したらいいものか。半個室の仕切られた空間が、しばし重苦しい沈黙に包まれる。

「それなら」

言いかけてあるのほうを見ると、あるは無表情のまま泣いていた。顔の筋肉は動くことなく、涙だけが頬を伝っては、ポタポタとテーブルの上に落ちていく。顔の筋肉は動くことなく、

「ある……」

テーブルの上に置かれたあるの右手を思わずギュッと握る。あるの表情は変わらないが、涙が落ちるスピードが速くなったように感じる。いつもながらぼくはもらい泣きしてしまう。「お飲み物のおかわりは」と筆簞を持ちあげた店員は小声で謝り、気まずそうにその場を去っていく。

「だめだよ、あるは元氣じゃなきゃ」

あるは真つ赤な目をこちらに向け、少し口角をあげて見せる。炭酸の抜けたコーラみたい。パUNCHがなくて、甘ったるさだけが残る。

「とにかく、家に帰ろう」

ぼくはその足であるが今住んでいるゲストハウスに寄り、半ば強引に荷物をまとめ、彼女を北谷のアパートに連れて帰った。

こういうのをウツの状態というんだろうか。あれほどにも自己主張がはつきりしていたあるが、何をしたいとも、したくないとも言わない。決断ができなくなってしまうている。アパートに連れて帰ったときも、ちよつと戸惑つてはいたものの、流れに抗うことはしなかった。ぼくのアパートは2LDKだ。以前、一緒に住んでいた頃、右側の和室はぼくの、左側の洋室はあるの部屋になっていた。ぼくはあるが出ていった後も、洋室はそのままにしていたから、あるはすんなりそこに戻る形となった。あるは前と同じように、そこから仕事に通つた。彼女は教師という立場上、仕事るときは無理をして今まで通りを装つていようだったし、メニエール病のため、抗鬱剤、抗不安剤、酔い止め、睡眠薬と名前を聞いただけで具合が悪くなりそうな薬を飲んでいただけもあり、家にいるときは常にぐったりとしていた。発する言葉は「ごめんね」ぐらいのもので、毎晩、何かを吐き出すように、でも、なるだけぼくに聞こえないように、声を押し殺して泣いていた。この病気は今のところ治療法がないらしい。ひどくなると歩けなくなるケースさえあるという。あるは毎日、めまいに効果的とされているストレッチをしていたが、特に改善は見られず、ぼくにはただの気休めに過ぎないように思えた。

そんな出口の見えない毎日の中で、出会つたのがシヤアだった。シヤアはゴマあざらしの赤ちゃんの姿をした白い抱きぐるみ（抱き枕型のぬいぐるみ）だ。あるが多摩川にきたアザラシが「たまちゃん」なら、北谷（ちゃたん）にやつて来たこの子は「チャータン」だね、と言ひ出し、それが、「チャー君」（この時点で性別は男の子に決まる）、「シヤア君」を経て、最終的には「シヤ

ア」に落ち着いた。那覇の大きいサンエーに行つたとき、一階の中ほどにあるお店に彼はいた。もともとはサンプルで店頭に出ていたものだったらしく、色んな人に触られ、白かつたであろうその体は、うっすらと汚れてしまつていた。

「洗ってください、つて書いてある」

そのアザラシのおでこに貼つてあるメモ書きを指し、あるは言う。

「ほんとうだね」

ぼくはそれを手にとつて抱きかかえてみる。フワフワして肌触りが気持ちいい。見ると、ブライスシールに赤いマジックで二重線が引かれ、その上に「見切り品五〇〇円」と書き加えられている。

「アザラシの見切り品つて、ねえ」

その表現が可笑しくて、あるを見ると、あるはとろけそうな表情でその頭を撫でていた。

「洗つてあげようか」

あるは久しぶりに満面の笑みを浮かべぼくを見る。ぼくらは帰り際コインランドリーに寄り、シャアを洗つて、乾燥機にかけた。きれいで、さらにフワフワになった彼を、あるはずつと抱いたまま家に戻つた。

「ミヤ、ねえ、ミヤ」

あるに揺さぶられ、目を覚ます。寝ぼけ眼をこすつて、あるを見る。今日は顔色がいいようだ。

「どうした、うれしそうじゃん」

「シヤア、すごいよ！」

あるは愛おしそうにシヤアをギュツとしている。聞けば昨晚、シヤアを抱いて眠ったら、胸のあたりから何とも言えない「癒しの何か」がシヤワーのように溢れ出て、朝起きたら、いつものめまいがパタツと止んでいたという。たまたま一日だけじゃないかと思ひ、その後、何日か様子を伺っていたが、それきり嘘のように症状がなくなった。

「シヤアは、おいシヤアさんだからね」

あるはつまらない駄洒落が言えるまでに回復した。すこし元気になったあるは、ぼくへの恩返しとばかりに、献身的に家事をした。苦手な掃除や片付けも進んでやり、気まぐれで作ったり、作らなかつたりしたごはんも、毎日作るようになった。ぼくたちは一緒にテレビを見て笑いあったり、時々シヤアを連れてドライブに行ったりした。それは決めごとのない穏やかな同居生活だった。ぼくはいろいろと聞きたいこともあつたけれども、もう少しあるが元気になつてから、とずつと先延ばしにしてしまつていた。

しかし、ずっと曖昧なままでいることは難しい。口火をきつたのはあるだった。

「ミヤ、私、ミヤにほんとうに感謝してるよ。本当にありがとうね。ミヤがいなかつたらどうなつていたか……。いつも迷惑ばかりでごめんね」

あるが作った辛口のキーマカレーを食べたあと、ゆず茶で口の中を中和しているほくにあるは言う。

「いいよ、あるが元気になったんなら、それで」

「ほんとミヤ、やさしい」

ゆず茶の甘みと温かさを口の中いっぱいを感じながら、しみじみとする。長年寄り添った老夫婦みたいな趣だ。

「それでさ、もう元気になったし」

「うん」

確かに。

「大丈夫だからさ」

「そう、よかった」

本当に。

「だから、そろそろ引きあげなくちゃね」
流れが変わる。

「えっ、いいさ、ここにいりゃあ」

特に問題ないけど。

「うーん、ミヤがそう言ってくれるのは嬉しいんだけど、私、ミヤがいるとずっと頼っちゃうし、迷惑かけちゃうし」

「べつに、迷惑なんて」

今さらね。

「ミヤは優しいからさ、私のこと心配で、見捨てられないんでしょ」

「まあ、心配はしてるけど」

散々ね。

「私もちゃんとしなきゃいけない。まだ、解決していかないこともあるから」

「解決してないこと？」

「うん、解決っていうか、自分の中に残ったままというか」

残ったままなんだ……。

「そうか」

ぼくはいつかの和美さんの話を思い出す。

「ミヤはわたしの具合が悪かったから、何も聞かないでいてくれて。そういう気遣い、ありがとう
く思ってる。でも、ずっと、それは心の中にあつて。こんな気持ちを隠したまま、ここにいさせ
てもらってるの、いたたまれなくって」

嘘も方便、それも優しさ。その素直さは、じんわりとぼくの心を蝕んでいく。

「彼から先週電話があつて……。ごめんねって。お金のこととか、いろんなこと」

「そう。彼もいろいろ考えたんだろね。今になって、悪いことしたなあって」

できるだけ、冷静に。

「バイトも見つかつて、お金、少しずつ返すからって」

「いいっけじゃん。お金はちゃんとしないと」

あくまでも、客観的に。

「それでね……、今までのこと、ちゃんと反省して頑張るから、もう一度、そばで見守ってほしいって」

「……そっかー」

ぼくは、大人、だから。

「だからって、引き止めなかったわけえ？」

英樹はマイルドセブンのソフトケースをトントン叩く手を止め、ぼくを睨む。彼はイズミのバーで知り合った、うちなんちゅの友だちだ。

「だって、あるがそういうんだからさ」

「はっさ、よー」

お決まりの反応。

「サトーはさー。あっちゃんのこと好きじゃないわけ？」

「うーん、好きとか、嫌いとか、正直よくわかんない。長いこと、そんな感じできちちゃってさ。けど」

「けど？」

英樹は詰め寄ってくる。

「いないと、物足りないっていうか……。毎日、予想がつかなくてハラハラ、ドキドキ、だから

こそワクワクするみたいなの

うまく表現できない。

「確かに、フツーじゃないからな。あっちゃんも、お前も、お前らの関係もさ。新しい、明らかにニュータイプ」

そう、規格外。

「それに何ていうか、役割とか、生きてる意味とか課題みたいな、そんなのを突き付けられてるような気もするんだ」

どうにか、まとまってきた。

「へえー、生きてる意味ねー。そういうの、彼女に伝えたことあるか？」

ぼくは考える。最近、ここ数年、十年前、出会った頃、よくよく思い返してみる。でも覚えてる限り、一度も無い。いつもあるに言われるがままに、行動してきた。ぼくは自分の考えをあるに伝えるどころか、自分の彼女に対する想いを立ち止まって考えたことすらなかったと気付く。言いようのないモヤモヤが心の奥底から灰色の煙となって立ち込める。

あるから連絡があったのは、それから数カ月後、三月の中旬だった。あるのおばあちゃんが肺癌にかかり、その看病のために、彼女は仕事を休み、茨城に帰っていた。おばあちゃんはここ数日、かなり危ない状況になっており、最期にぼくに会いたがっているということだった。あるは、ぼ

くと別れたことも、新しい人と付き合っていることも、おばあちゃんに話していないようだった。ぼくは非常に複雑だったけれども、あるのおばあちゃんには、いつも良くしてもらっていたし、会わずじまいになるのは後味が悪くなると思い、行こうと決心した。

初めて一人で訪れるあるの実家は、いつにも増して大きく見えた。ぼくは深呼吸を三つし、おらずおすと玄関のチャイムを鳴らす。

「ミヤくん、久しぶり。忙しいところありがとう」

にこやかに出迎えてくれたあるのお母さんの顔を見て、それまでの緊張が一気にほぐれる。

「ご無沙汰してしまって、すみません。お母さん、お元気でしたか」

「ほんとうにしばらくね。私は元気よ。いつも振りまわしちゃってごめんさいね。おばあちゃん二〇一の病室にいるから、先に行ってみてもらってもいい？ 悪いけど私はまだ診療中だから、終わり次第、行くわね」

彼女は仕事の合間だったらしく、そう言い残すと、病院に戻って行った。ぼくはお母さんが、今のぼくたちの状況を知っているか確認したかったが、結局、聞けずじまいになってしまった。

あるのおばあちゃんは、彼女の両親が実家の隣で開業している病院の一室にいた。あるの実家は産婦人科だから、おばあちゃんの今の病気は専門外になる。おばあちゃんは最初、市内の大きい病院に入院していたのだが、延命のための抗癌剤治療をせず、自宅で最期を迎えたいとい

う意思で、実家であるこの病院に戻ってきたという。ぼくが病室に入ったとき、おばあちゃんは胸を上下させ、機関車のような呼吸をしていた。口に付けた酸素マスクは呼吸で曇っている。あるは傍らで、その様子を静かに見守っていた。

「苦しそうですね。体力なんてほとんどなくなってるのに、頑張つて息しててさ」
あるは激しく動いている布団の上にふわりと手を被せる。

「ミヤ、ありがとう。せつかく来てくれたのに、もう昨日から、呼んでも返事がなくて……」
あるは困つたように眉を八の字にして見せる。ぼくはベッドの横にあるパイプ椅子に腰かけてから、布団に隠れたおばあちゃんの左手をそつと取り、自分の右の手の平に重ねてみる。痩せ細つてシワシワになつた手をもう片方の手で撫でると、涙が溢れ出してきた。

「おばあちゃん、ごめんね、ずつと会いに来れなくて、ごめん」

「ちがうの、ミヤは悪くないの、私が悪いの」

声を震わせ、あるはぼくの背中をさする。何だか本題がズレてしまっている。ふと、右手に微かな感覚を覚え、おばあちゃんの顔を見ると、昏睡状態だつたおばあちゃんがまぶたを開き、一生懸命、何か言おうとしている。ぼくはおばあちゃんの口元に、耳を近づけてみる。

「……りがとう、……ありがとう……」

おばあちゃんは力の限り声を振り絞つて、そう囁く。ぼくはこのタイミングを逃してはならないと、とつさに返す。

「おばあちゃん、大丈夫。ぼくが、あるを守るから。何があつても絶対に守るからね。心配ない

からね」

おばあちゃんの目から一筋の涙が零れ落ちる。彼女はほくに応えるように握った手に力を込め、ゆっくりと頷く。やがて、穏やかにまぶたを閉じ元の呼吸に戻る。ほくもあるも、起こったばかりの出来事に、しばし呆然とする。

「ミヤくん、晩ご飯できたから食べようか」

仕事が終わったらしく、あるのお母さんが、病室に呼びに来た。ほくは気を取り戻し、お母さんと一緒に自宅へ向かう。

「こんなので、申し訳ないわね。買い物する時間も無くて」

お母さんはすまなさそうに、ほくの前にカレーライスを差し出す。レトルトのようだが、きつと高級なやつだ。

「どうもすみません。ところで、お父さんは？」

ここに来てから全然、あるのお父さんの姿を見かけていない。

「今日、ちょっと大変な患者さんが入院してて。今、そっちにかかりつきりなのよ。こんな時なのに、ね」

「そうですか、相変わらずお忙しいんですね」

「ほんとうに、ねえ。さあ、食べて、食べて」

「いただきます」

カレーには魚介がゴロゴロ入っていて、繊細な味がした。

「たぶん、今日あたりが山場だと思うの」

お母さんは食べ終えたお皿を重ね、涙ぐむ。ぼくはさつき一瞬、おばあちゃんの意識が戻ったことを伝える。

「おばあちゃん、ずっとミヤくんに会いたがってたから……」

ぼくは、さつきのおばあちゃんの表情を思い出し、胸がいつぱいになる。

「ミヤくん、ごめんね。ほんとうは今、あると付き合っていないんですよ？」
不意の直球。

「えっ？ あっ、何か、聞いてるんですか」
慌ててしまう。

「ううん、何も。あの子は私たちには何も言わないから。でも、何か隠してるなあつてのは感じる」
「……そう、ですか」

ぼくから言つていいものなのか。

「ミヤくんには、いつも悪いと思つているのよ。あるのこと、全部押しつけちゃつて」

「いえ、いえ、ぼくは……」

もう慣れましたから。

「私たち、こんな職業でしょ。特にあの子が小さいときは患者さんが多くて、とにかく忙しくつてね。全然かまつてあげられなかったの。なにしろ、私たちも余裕がなかったもんだから。いちばん甘えたい時期に、甘えさせてあげられなかったのよ」

「そうだったんですね」

幼いあるが寂しそうにしている姿を想像し、切なくなる。

「上も下も男の子だったから、心配なかつたんだけど、あの子一人、女の子でしょ。寂しかったと思うのよ、きつと。どこを心の拠り所に行っているか、分からなかつたんじゃないかしらね」

「確かに、あるは寂しがり屋ですよ。普段は強がってますけど」
弱いくせに。

「そう、それにいつも不安定で落ち着きがないでしょ。人とも、どう接していいか分からないのよね。距離を取りすぎてしまったり、かと思うと近くなりすぎてしまったり。バランス感覚がすごく悪いっていうか」

「まあ、器用なほうではないですよね」

驚くほどに、超不器用。

「ミヤくんは、あんな子でも、根気よく面倒を見てくれて。あなたが傍にいてくれるから、私たちも本当に安心だった。だから、つつい、ミヤくん任せで……、ごめんなさいね」

「ごめんなさいなんて、そんな……」

同じじゃないか、お母さん。

「まあ、二人のことだから、私が口出しすることじゃないんだけど、これはあくまで、私個人の気持ちとして」

お母さんは一旦、姿勢を正して続ける。

「私は、ミヤくんがあの子とずっと一緒にいてくれたら、って思ってるのよ」
ゆっくりと着実に背中を押され、日の注ぐ方向へ。

「ありがとうございます。頑張ってみます」

口をつけて出てきた自分の言葉に、思いの外、勇気づけられる。

その日の晩、あるのおばあちゃんは息を引き取った。ぼくは一泊だけして帰る予定だったが、結局、お通夜、お葬式が終わるまで、その後、三日間滞在した。男兄弟が仕事で忙しいこともあり、ぼくはお嬢さんのようにお葬式の準備を手伝ったり、親戚を送り迎えしたり、香典返しを注文したりと大忙しだった。あるに限らず、人からいろいろ頼まれやすいのは、どうやらぼくの性分のように。

ぼくが沖縄に帰る日、あるは最寄りの駅まで送ってくれた。伝える準備はできている。ぼくは駅の売店でマックスコーヒーを二本買い、あるに一つ手渡す。

「げっ、これ超甘いよ」

甘いものが苦手なあるは、顔をしかめる。

「せっかく茨城に来たんだから、ここでしか買えんもん飲まんよ」

「ああ、そう……だね。ミヤ、遠いところありがとね。こんな長いことしてもらって悪かったね」

「大丈夫、おばあちゃんと話もできたしさ。それより、ある」

「うーん？」

あるはずなのに、コーヒーを啜りながらぼくを見る。

「彼とは、どうなってる？」

「フツーに付き合ってるよ、遠距離だけど。今は落ち着いてる」

フツーって、何だよ。

「将来は？」

「しょうらい……、そこまで考えてない。彼、まだ若いし」

あんたは若くないし。

「家族は、彼のこと知ってるの？」

「ううん、心配すると思うから、言っていない」

計画性、まるで無し。

「あるが彼のこと好きなのは分かるよ。でも、ずっと付き合っていくのはきつと難しいと思う。また、いろいろ傷つくこともあるかもしれない」

あるは黙り込む。

「もう、そんなふうになってほしくない。傷つくあるを見たくないんだ」

ぼくはコーヒーを一口飲み、続ける。

「再来月、五月十五日、何の日だかわかるでしょ？」

「……うちのお母さんの誕生日」

一旦、深呼吸。

「その日まで、待つてる。その日に、あるがぼくとやってこうと思つたら、結婚しよう。今まで、散々心配かけてきたお母さんの誕生日に、家族になろう。ぼくはあるを幸せにしたい。いや、しなきゃいけない。おばあちゃんとも、お母さんとも約束したんだ。あるをずっと守ってくつて、それがぼくの役目なんだ。もしも」

「もしも？」

あと一息。

「その日までに返事がなければ、あるのことは、きつぱり諦める。三十一歳の五月で、最後」
言い切れた。

「三、一、五で、さいごか。なるほど、わかった。ありがとう」

体がふわつと宙に浮いて、その後、足の裏に振動がずしりとくる。もう悔いは無い。

五月十五日、ぼくは休みを取った。奇しくも今日は沖繩が本土に帰ってきた「復帰の日」。テレビでは特番が放映されている。ぼくは緑色に縁取られた薄っぺらの紙に、あるの署名以外、全ての必要事項を書き込み、こちらの復帰に備える。お昼を過ぎても電話が無い。不安と諦めが入り混じる。やっと電話がかかってきたのは、夕方の五時を回った頃だった。

「ミヤ、久しぶり！ 元氣？」

元氣なあるの声。何やら、後ろが騒がしい。

「ある、今どこ？」

「今、吉祥寺」

「はっ？ なんで吉祥寺？」

沖繩にいないの？

「ABCマートにいる。スニーカー買おうと思つて。ミヤ、足のサイズいくつだっけ？」

はあ？ あるの行動は、全くもつて不可解だ。

「ある、今日、何の日だか分かつてる？」

「うん。ミヤ、結婚しよう！ ざーっと一緒に、仲良く年を取ろう！ よろしくん。とりあえず私、

今東京だから、こつち来ちゃう？」

なんだかなあ……、想定外のことばかり。結局あるのペースに巻き込まれ、若干イライラさせられながらも、ぼくは思う。こんな人生、だから、面白い。

小説部門佳作

ブルーータスの歌

迫田 祐樹

僕は思い出す。遠い昔の記憶。

微かな埃の匂いと、内装に使われている木の匂いが混じり合っている。この匂いは、僕が知っている限りこのガレージでしか感じることは出来ない。エンジンオイルやガソリンの残り香、あるいは無数にある工具の匂いが複雑に混ざり合い、鼻を突くのではなく、体内を隅々まで巡り、全身を包み込む。それがそのガレージの一番の印象として、記憶に残っている。例えば目隠しをされて放り込まれたとしても、すぐにこの場所をイメージ出来るだろう。匂いとはそういうものだ。天井にあるオレンジ色の暖かいランプの光には、何かを照らしてやろうという主張は全くなく、ただその部屋に存在しているだけだった。その奥ゆかしい光のおかげで、ガレージの空気は永遠を感じさせる程に落ち着いている。このガレージの住人である叔父は、特にそういう雰囲気を好

んだ。

僕は幼少時に、よくその部屋にいた。あまり帰ってこない叔父をその部屋で待っているうちに考え事に夢中になって、何時間も過ぎてしまうことがよくあった。待っている、といっても、半ばは特に期待していない。家にいることが少ない叔父を待つのは幼心にも無駄だと理解していたので、少しでも叔父の存在を感じることができればガレージにいた、という方が近い。僕と父親が住んでいた家に増築されたそのガレージは、半分がバイク専用のガレージで、もう半分はそのまま叔父の住まいに改造されていた。ガレージ部分の床はコンクリートだが、それ以外は全面木張りで、壁にはたくさんさんの工具が並んでいる。それらをひとつひとつ見つめ、どんな風に使うのか考えているだけで、時間は知らない間に知らない場所へ流れていった。

「ケイ。またここにいたのか」

背後から突然呼びかけられる。家とガレージを繋ぐドアに立っていたのは父親だった。撫で付けた髪に大ぶりの黒ぶち眼鏡、上着を脱いだスーツ姿。父は常に、ありきたりなビジネスマンスタイルだ。どの街に行っても、平日の男性ファッションの中では最も多いスタイルだろう。しかし、父は他の多くの男性とは明らかに違う部分があった。しつかりとした背筋、堂々とした立ち居振る舞いからは、誰よりもそのスタイルに対する誇りがあった。そのスタイルで生きていくという、確固たる意思がその姿から感じることが出来た。簡単にいえば、父は普通のビジネスマンではなく、優秀なビジネスマンだったのだ。

「おかえりなさい。帰ってたんだね」

「ここには、あまり入るなと言っておいただろう？」

「あ……、ごめんなさい」

父は、あまり大きな声は出さない。だが、学校の教師がヒステリックに大声をあげるときよりも、それは僕に恐怖を与えた。

「ケイ。お前はそんなにここが好きなのか」

「ごめんなさい。だけど、僕はこの部屋がとても好きだよ」

「服に油の匂いが染み付くぞ」

そう言って、父は溜息をついた。

僕の父親。一緒に住んでいた叔父さんを除けば、僕のたった一人の家族。母親は、幼い頃に亡くなっていた。記憶は全くなく、ただぼんやりとしたイメージがあるだけだ。父は常に仕事が忙しく、必然的に一人で過ごすことが多かった僕は、周りの子供よりは聞き分けの良い、悪く言えば意思が弱い子供だった。

「ケイ。父さんはこれから会合があるんだ。だから、また出て行かなくちゃならない。すまないが、夕食は一人で食べてくれないか」

「あ、そうなんだ。わかったよ」

「これでピザでも取っといてくれ」

父はそう言って紙幣を差し出す。

「父さん。ピザは昨日食べたよ」

「え、そうだったか。それじゃ、あの角の店でチキンでも買ってこよう」

「チキンは一昨日、父さんが買ってきたやつを食べたじゃない」

「ああ、そういえば、会議があった日か。参ったな、他に店は……」

父はそう言って、ちらりと腕時計を見た。反射的な動きだろう。しかし、僕はその動作が本当に嫌いだった。父が腕時計を見た瞬間、一瞬だけ僕という存在がこの世から消え失せるのだ。

「父さん、大丈夫。今夜もピザにするよ」

父が僕に視線を戻す。案の定、ああそうだ、食事をさせるんだった、とでも言い出しそうな表情。父は悪気を持ってそうしている訳じゃないのだが、それでもやっぱり悲しいではある。

「昨日はチーズとサラミの載ったやつを食べたんだ。今日はツナとコーンのやつにするよ。これもおいしいんだ」

「そうか。そうしてもらえると助かる」

悲しい気持ちを精一杯抑え込んで、僕は紙幣を受け取った。多分、僕は気持ちを抑えることが上手な子供だった。

「クラスの友達に二晩続けてピザを食べたなんて言ったら、みんな羨ましがって、僕、無事じゃすまないよ」

そう言って笑ってみせると、父は安心した表情を見せた。そう、人は自分が正しいことをしているという、抛り所が必要なのだ。それは、父のような強い人間でも同じことだった。『息子が腹一杯ピザを食べられるように、しっかりと稼がなければ』。父がそう思ったかどうかは知らない

いが、父はさつと表情を変えて腕時計に目を移し、その瞬間、また僕は父の世界から消えた。

*

僕は思い出す。今まで何度となく引つ張りだして、包みを解いて、見つめ続けてきた。箱から出す過程で縁は痛み、手あかにまみれ、折り目は今にも千切れそうになっているけど、それでも思い出さずにはいられない。その過去は間違いなく僕自身であり、今の僕に繋がる全てだ。時間とともに色褪せて風化してしまっているけれど、いまだにそれは僕の思考の根元に存在して、そしてその思考を元に僕は行動している。細分化した現在の僕の全ては、そこに帰結する。たくさんさんの葉をつけた枝の一本一本が、中心の太い幹に続くように。そして、人は生きている限り細分化をやめない。

*

遠くの方から、聞き覚えのある音が聞こえてきた。最初は気のせいかと思ったけど、目の前の父も、腕時計から目を離して音が聞こえる方に顔を向けたことから、それが気のせいではないことを確信できた。家の前を貫く長い真っ直ぐな道路のせいで、正比例的に増量していくその音は、僕の確信をそのまま喜びに変えた。

重心の低い、連続した破裂音を聞いて、父があからさまに顔をしかめる。そんな父の表情を全く意に介さないかのように音はどんどん大きくなっていき、遂にはその音が僕たちのいるガレージのシャッターの前で最高潮に達した。シャッター越しにもわかるほどのその轟音は、周囲を威圧するようにそこに鎮座している。

僕はいてもたってもいられなくなり、シャッターの取っ手に指をかけると、思い切り引き上げた。その瞬間、轟音はさらに何倍にも膨れ上がる。ヘッドライトによる逆光で真っ黒に隠されたその存在感は、夜の闇にとけ込んで、いつそう凶暴に感じた。いつ見ても、圧倒されてしまう。

僕が急いで脇によけたのを確認してから、その獣はエンジンを唸らせて巨体をガレージに滑り込ませた。ガレージの壁に反響して、轟音はさらに大きくなる。父を見ると、耐えかねたように思い切り目を閉じていた。大胆に曲がったクロームメッキのハンドル。涙の形を思わせる流麗で幅広いガソリントランク。ひととき大きな存在感を放ちながら震える、中心のV型ツインエンジン。アメリカンタイプと呼ばれるそのバイクは、とにかく全てが大きかった。

父が何かを叫ぶ。排気音にかき消されて声は全く聞こえなかったが、それに反応するように、バイクは一度大きな叫び声をあげた。その音を聞いて父はまた顔をしかめたが、その音を最後に排気音は急激に小さくなっていき、やがてエンジンは止まった。

完全なる静寂。大音量で耳を痛めつけすぎたのか、耳鳴りが頭の中に響いている。それ以外は何も聞こえない。父は呆れ顔でかぶりを振るだけだった。バイクに跨がった男はそれを気にする様子もなく、手にはめていた革のグローブを外し、脇の棚の上へ投げる。そしてゆっくりとバイ

クを降り、父と僕を交互に眺めてにやりと笑った。僕はとても興奮していた。

「なんだなんだ、お二人さん。わざわざ出迎えてくれたってのか。こいつは嬉しいじゃねえか」
男はそう言いながら、おどけて大げさに両腕を開いてみせた。

「レイ叔父さん！」

僕は叫んだ。そして心の向くままに走り出し、レイ叔父さんの腰のあたりに思い切り抱きついた。
レザージャケットの、独特の匂い。

「おっと。ケイ、熱い抱擁で出迎えるとは情熱的だぜ」

「お帰りなさい。今回はすごく長かったね。三ヶ月ぶりぐらいだよ」

「そうなんだ、ちよいと道に迷っちゃまってね。この話は後でゆっくり聞かせてやろう。大変だったんだ。三日間走り続けても、森を抜け出すことが出来なくてね」

「それは、お前の人生の話じゃないだろうな、レイ」

父が口を挟む。それを聞いて、レイ叔父さんは大げさに笑う。

「兄貴！ いつからそんな冗談を言えるようになったんだ？ 固い頭がちよつとは柔らかくなつたか。なあ、ケイ！」

そう言つて、レイ叔父さんは僕の頭を乱暴に撫でた。父が溜息をつく。僕は恐ろしくて、父に目を向けることが出来なかった。

「レイ、前から言ってるだろ。いい加減にしろ。お前のバイクは近所迷惑なんだ。自分でわからないのか？ せめて、家でエンジンをかけるのは昼間にしてくれ」

「そいつはすまなかつたな。今日はちよいと月が綺麗だったもんでね。それよりも、二人は飯を食ったのかい？」

父がハツとしたように腕時計を覗き込む。それを見て、レイ叔父さんが鼻で笑った。きつと、僕と同じことを考えていたのだろう。

「しまった。もう時間がない。私はこれから会合で出て行かなくてはならないんだ」

「そうか、そりゃ残念だね。なら、マリーのとこのダイナーでステーキを食うか、ケイ。あそこはまだ潰れてないよな？」

レイ叔父さんの言葉は、いつも魔法使いの呪文みたいだった。何を言っても、僕を最高に興奮させてくれる。そして、いつだって父を呆れさせるか、怒らせるか、慌てさせる。

「待て、レイ。こんな時間から、ケイを連れてダイナーなんて……」

「大丈夫だよ、兄貴。俺がついてるんだから」

「お前と一緒にだから不安なんだ」

「どうせ、ピザでも取らせる気だったんだろう。ダメだぜ、兄貴。ケイだって男なんだから、肉を食わないと」

僕はおかしくて笑い出してしまった。父がバツの悪そうな顔でかぶりを振る。

魔法は本当に効き目があり、レイ叔父さんがそこにいるだけで、僕の生活は楽しみに満ち溢れた。日常は非日常になり、世界は明るくなり、僕は夜のダイナーという刺激的な場所に連れて行ってもらえた。たとえ、その後レイ叔父さんがとんでもない量のステーキを注文して、食べ過ぎて

しばらく動けなくなつたとしても、僕は本当に楽しかった。

*

僕は呼びかける。思い出す度、何度も何度も呼びかけてきた。だけど、呼びかけた瞬間、決まつて過去のイメージは消滅した。何もない場所に僕の声だけが響いた。過去は、こちらからのアクセスは受け付けないのだ。どうやっても、僕は過去と共存することは出来なかつた。どうしようもなく、僕は現実だつた。それでも、僕は呼びかける。消滅と再構築を繰り返すうちに、呼びかけること自体が意味を帯びてきた。時間が経つにつれ、呼びかける自分が過去に含まれてきた。それが良いのか悪いのかはわからない。けれど、それは僕を安心させた。そうすることやつと、僕は近づけた気がした。やがて時間とともに、呼びかける行為自体も縁は痛み、手あかにまみれ、折り目は今にも千切れそうになつていった。

*

「マリー、一パウンドのステーキを二つ、それとツナサンドとポテト・フライ。俺はバドワイザー、ケイはコーラでいいか？」

僕はカウンターに設置してある、背の高いスツールによじのぼりながら頷く。

「レイ、あんた正気かい？ 馬みたいな食欲はいつものことだが、こんな坊やが、一パウンドも食べられる訳ないじゃないのさ」

カウンター越しに答えるのは中年の女性。肩に届く縮れた髪と、かすれ気味の声で活発に喋るのが特徴的だった。長い間ほとんど一人でこの小さなダイナーを切り盛りしていた彼女からは、男性にも負けない強さを感じた。

「大丈夫だよ。な、ケイ？」

「僕、お腹すいて倒れそう」

そう答えたが、実際にどれくらい量の量なのかは理解しておらず、レイ叔父さんと食事が出来るだけで嬉しかったので、何が出てこようが構わなかった。

「全く、久しぶりだったのに、相変わらずだね」

「なにか違っていた方が変だろう」

レイ叔父さんの言葉に鼻だけ鳴らし、マリーは調理に取りかかる。

夜のダイナーは昼間とは全く印象が違い、異世界にいるような気分になった。夜の闇で一層強調された店内の不自然な明るさや、窓際に輝く派手なネオン、仕事を終えた、あるいはこれから始まる大人達の複雑な表情によって、その世界は混沌としたものに仕上がっていた。

「それで、今回はどこに行ってたんだい？」

しばらくして、調理中のマリーがこちらを見ずに尋ねる。客は、奥のボックス席に二組と、カウンターに僕たちだけだった。

「どこって、色々なところさ。今回はとりあえず南に向かっただけだよ」

「あてもなく、自由きままってやつかい。まったく、あんたはいつまでフラフラするんだい？」

「ああ、そういえば土産を買って来たんだったぜ。マリリーに持ってきてやれば良かったな」

無視したことを、マリリーはちらりと睨んで咎める。レイ叔父さんは肩をすくめながら僕を見て、にやりと笑った。

「叔父さん、何を買ってきたの？」

「ビーフ・ジャーキーだよ。山で迷ったとき、小さな集落に行き着いてな。その土地に代々伝わるスパイスの配合で味がつけてあるんだ」

「すごい！ どこにあるの？ そこ」

「それが、どうやって行つたのか、全然覚えてないんだ。迷つてたからな。けど、それで良いんだ。また行くべき時が来たら、道に迷うんだろうな」

そう言つて、レイ叔父さんは笑う。マリリーは、やれやれ、と呟いて首を振った。

「これがまた、とんでもなく固いんだ。普通の感覚で食おうと思つたら、まず噛み切れない。その土地の男たちはな、『ジャーキーは一日かけて噛みちぎり、二日かけて飲み込んで、三日かけて消化しなきゃいけない。女房の不機嫌と同じだ』と言つて笑うんだ」

「レイ、あんた子供になつてこと言うんだい。はい、あがつたよ」

マリリーが僕たちの前に大きな皿を置く。僕は一瞬、それが何かわからなかつた。しばらく眺めていて、やっと巨大な牛肉の塊だと理解した。一パウンド。子供だった僕には恐ろしい量だ。

「ここより固い肉があるなんて思わなかったぜ。良かったな、マリー」

「黙って肉を食うか、今すぐ出て行くか、どっちがいいんだい？」

レイ叔父さんはおおげさに口笛を鳴らして、聞いたか、ケイ、と僕に尋ねる。しかし、僕はそれどころではなかった。どうすればこの肉塊を胃袋に収められるのかを、ただひたすらに考えていた。

「かわいそうに。この子、驚いてしまってるじゃないか。無理して全部食べる必要はないんだよ。ええと、名前はなんと言ったかね」

「ケイだよ、マリー。それより、この肉はやっぱりうまいな。ビールを飲ませた霜降り肉なんて、とても敵わない」

「調子の良いやつだよ、全く。ケイ、あんたもこんな叔父を持つちまって、大変だね」

僕は曖昧に笑った。そして、とりあえずステーキを小さく切って、一口食べてみた。しっかりとした厚みを取った赤身の肉で、レアだが生ではない絶妙な焼き加減。強めにつけた塩と胡椒。口一杯に肉本来の味を楽しめる、牛肉を一番うまく食べる方法だった。

「おいしい！ マリーさん。このステーキ、すごくおいしいです」

自然に声が出た。本当に美味しい料理は、人を動かす。心を動かし、体を動かす。

「レイ、この子は本当にあなたの甥っ子かい？ とっても良い子じゃないのさ」

「そうとも。ケイはうちの家系で、最高傑作との呼び声が高いんだ」

僕は照れた。なぜ褒められたのかはわからなかったけど、自分が好きな人に褒められて、とて

も嬉しかった。

「まあ、近い家族があんたと、あなたの兄貴じゃねえ。あんたらの父親に色々相談されたもんさ。子供があんたらみたいなの凸凹兄弟じゃ苦労するさね」

「よしてくれ、昔話は。親父に散々言われてきたんだ」

「あんたらだけじゃ、ケイみたいなのは、突然変異でも無理さね」

「それも、周りにずっと言われてきたさ」

レイ叔父さんとマリーは笑う。時折、会話の所々に現れる僕の知らない断片。僕はその断片を見つけると、必ず拾い集めるようにしてきた。このことに関してだけは、誰にどう思われようと気にしなかった。たとえ、それがレイ叔父さんだろうとも。

「マリーさん」

「なんだい？」

「僕のママは、どんな人だったの？」

ほんの一瞬だけ、沈黙があった。もし他人がこの会話を横で聞いていても、全く違和感を感じない程の短い時間。だが、僕にははつきりとわかった。特に隣で座っているレイ叔父さんの心の動きは、目を見ていなくてもわかった。なぜなら、この一瞬の間、レイ叔父さんの世界で僕の存在が消えたのだ。

「ケイ。その話なら、俺たちが飽きるほどしてやっつたろうに」

「そうだけど……。けど、僕はママの話聞くのが好きだよ」

「やれやれ。変なところで強情だな。誰に似たのやら」

呆れたように、レイ叔父さんがビール瓶を傾ける。こうやってレイ叔父さんが動揺するのはわかっていたし、呆れられるのは辛かったけど、それでも僕は聞かすにはいられなかった。

「まあまあ、良いじゃないのさ。レイ、この子も母親がいなくて寂しいんだよ。皆が言うような、ありきたりなことしか言えないけど、いいのかい？」

僕は頷く。レイ叔父さんは黙ってステーキを食べていた。僕は話の内容を聞きたいのではなく、たくさんの人が母親について話す様を見ていたかった。

「そうさね。あんたの母親は、ここから遠いところで生まれ育った人だ。遠い南の、小さな島さ。独特の文化を持った島でね。何度か行ったことがあるけど、良いところだったよ」

マリイの声はしわがれていたが、言葉をはつきりと発音するため、耳に心地よく届いた。僕は、初めて母親の故郷を知っている人に会ったため、興奮したのを覚えている。

「島全体が、南国特有のゆつたりとした雰囲気満ちていてね。空と海が透き通るように青くて、とても美しいんだ。あんたの母親も、とても美しい人だったよ。長くてきれいな黒髪を、いつもなびかせていたね」

マリイは、自分の記憶を探るように目を細める。

「優しい人だったよ。それでいて凜としたところもあってね。元々病弱だったらしいんだが、筋の通らないことには、はつきりと意見を言うこともあった。ケイ、あんたもその血は引き継いでいるのかもしれないね。とても周りに気を遣う人で、特に弱い立場の人にはいつも優しく接して

いた。この街の住人は、みんなあの人のことが好きだったよ。なあ、レイ？」

レイ叔父さんは、少し驚いたようにマリーに目を向けたが、溜息をひとつついて、ビールを一口飲んだ。

「ああ、そうだな。みんな義姉さんのことが好きだった。ケイ、お前の母親は皆に好かれる、誇るべき女性だった」

僕は、とても嬉しくなった。会ったことはないけれど、自分の母親が街の人気者だったということに、とても誇りを持てた。何よりも、大好きな人に褒められる母親を持てて、とても幸せだった。

「こんなところかね。ちようどあがったよ。さあ、お食べ」

「ああ、もういいだろ。昔話をするほど、俺は歳を食っちゃいないのさ。まずは食おう」

そう言つて、レイ叔父さんはマリーが差し出した皿に手をつける。大量に盛られたポテトと、厚切りで具沢山のツナ・サンド。これだけでも、相当のボリュームだ。

「まったく、本当に馬のようだね」

優しく笑うマリーを見てから、僕はまたステーキを食べ始めた。

突然、背後で耳を突く音が聞こえた。音の正体はラジオのスピーカーで、それまで控えめにかけられていた音楽を中断して、突然コーシャルが流れ始めた。それまでより派手で、下品で、堅苦しいその音は、これまでに何度となく聞いたことのある音だった。隣のレイ叔父さんは、大きく顔をしかめて舌打ちをした。マリーも、怪訝な表情をしている。

「くそ、なんだってんだ。突然こんなもんを流しやがって。この国は頭がおかしくなったのか。大体こんなコマージュナルを聞いて、『そうだ、軍隊に入ろう』なんていうやつがいると思ってるのか」それは国軍の入隊志願者募集のコマージュナルだった。テレビでも同様のものが流れており、派手で下品な音と共に、画面内にいる歴代の国のトップが視聴者に人差し指を向けて『君の力が必要だ』と言うのだ。

「嫌だね。戦争が始まるのかね」

マリイが不安げに言う。当時は、隣国が急な成長を遂げており、かなり強気な外交を行っていることで、世界の注目を集めていた。そしてこの頃、特に軍事に力を入れており、緊張はピークにまで達していた。僕たちの国も軍に力を入れざるを得なかった。

「戦争なんて、頭のおかしいやつのことだ。誰が得をするんだ。絶対に国民じゃない。国の上層部のごく一部さ。殺し合いが肯定される時なんて存在しないんだ」

僕は驚いた。レイ叔父さんが、こんなに怒りをあらわにすることは珍しかった。

「不思議だね。他人を傷つけないなんて思ってる人は少ないだろうに」

「そうだろうな」

「なのに、なんで戦争なんて起こるのかねえ」

マリイがため息をつく。僕も不思議だった。

「楽になりたいのさ」

レイ叔父さんが呟く。ほんの一瞬、食堂の中の空気に違和感が走った。まただ。この違和感は、

僕が日常的に感じているものだ。どんなに似ていなくても、やはり父とレイ叔父さんは兄弟なのだ。

「ケイ、お前もう腹いっぱいだろう」

一瞬後に、何事もなかったかのようにレイ叔父さんは話し出す。レイ叔父さんの皿には、すでに少量のソースしか存在していなかった

「え、あ、うん。ごめんなさい。食べ切れなくて……」

とうの昔に胃袋の限界は過ぎていた。レイ叔父さんとの食事で残したくはなかったが、どう見積もっても残りを平らげるのは不可能だった。

「いいんだよ、ケイ。初めからお前が全部食べるなんて思っちゃいけないさ。マリィ、すまない。残りを箱に包んでくれないか」

マリィは眉を上げて頷く。

「明日の朝、お前の父親に食わそうじゃないか。『ケイより、愛を込めて』ってメモを残しとくんた。いつも放つたらかしたから、たまには復讐してやれ」

レイ叔父さんは悪戯つぼく微笑んだ。

「ダメだよ。父さんは、いつも朝はトーストとサラダしか食べないんだ」

「『欲張ったり、飢えることもない。人は皆兄弟だと想像しよう』ってか」

レイ叔父さんは鼻で笑った。

「何、それ？」

「なんだと？」

レイ叔父さんは大げさに眉根を寄せて首をひねる。

「ケイ、お前この曲を知らないのか？」

「え、うん。歌なんだ。聴いたことないよ」

「なんてこった」

レイ叔父さんは本当に驚いているようだった。

「おい、マリー聞いたか。一体兄貴はどんな教育をしてるんだ？ 信じられないぜ、この曲を知らない人間がいるなんて。マリー、ちよつとギターを借りるぞ」

そう言うと、レイ叔父さんはレジやら飴玉の箱やら店の名前が書いてあるマッチやらが置いてあるカウンターの端に歩いていき、そこに立てかけてあるアコースティック・ギターを手に取った。

「よしとくれよ。大切なものなんだから」

「何が大切だ、こんな埃にまみれているくせに。大体、誰も弾かないのになんでこんなものがこの店にあるんだ」

「うるさいね。無理に弾かなくてもいいだろう」

「誰かのものなのか？」

「エルヴィスさ。それは彼に捧げてるんだ。彼は永遠のヒーローなんだよ」

「はっ、年を考えろよ、マリー。十代の娘じゃないんだから」

レイ叔父さんの言葉に、マリーは呆れた表情でかぶりを振った。しかしレイ叔父さんは気にする様子もなく、チューニングを始めた。ボックス席にいた客も、最初は何事かと様子を伺っている

だが、騒ぎの中心がレイ叔父さんだということを認めると、苦笑いをして自分の食事に集中した。「ケイ。覚えておけよ。今世紀最大の名曲だ」

レイ叔父さんはそういうと、力強くもしなやかな指使いでギターを爪弾き、伸びやかな低い声で、メロディーを歌い始めた。

次の日学校に行くと、僕は唐突に恋をした。レイ叔父さんが帰って来る度に僕の人生に変化はあったけど、これほど大きな衝撃はなかった。人を好きになるという重みを、初めて知った瞬間だった。放課後の教室で、僕は帰る準備をしていた。前の晩に聴いた曲をうろ覚えで歌っていた。誰もいないと思って、気が大きくなっていたのかもしれない。時折レイ叔父さんの低い声での歌い方を真似しながら、頭の中で鳴るギターに合わせて口ずさむ。背後から突然声が聞こえたのは、一番を歌い終わってからだった。

「学校でこんな名曲を聴けるなんて、思ってもみなかったわ」

振り返ると、金色で長い巻き毛の女の子が教室の入口に立っていて、ブルーの瞳で僕を見つめていた。僕は驚きと歌を聴かれた恥ずかしさでとても動揺していたけれど、この曲を知っている人に出会えた嬉しさで思わず話しかけていた。普段、口数が少ない僕にとっては、とても珍しいことだった。

「この曲、知ってるの？」

「もちろんよ。名曲だわ。同級生が知ってるとは思わなかったけどね。だけど、あなたが歌った

フレーズ、ちよつと違う部分があるの。正しいのはこんな感じ」

他の同級生よりもだいぶ大人びた口調でそう言ったあと、透き通る様なきれいな声で、彼女は僕が歌っていた部分を口ずさんだ。教室の中の世界が変わった。僕の心は急速に、大変革後の世界に引きこまれていった。フレーズの終わりのヴィブラート、その最後の瞬間まで勿体ぶつたように伸ばしたあとに彼女の歌は終わり、その瞳は僕を見つめた。そして少し恥ずかしそうに笑った。

「どう？ こっちの方が歌詞に合っていると思うの。私はミシエル。教室はこの廊下の端っこ。あなたは？」

僕の心臓は思い切り暴れ回り、肺は息を吸うのを忘れるほどにこわばっていた。

何を喋ったのか全然覚えていないけど、驚いたことに途中まで一緒に帰り、世間話をした。そして別れ際に呆然と彼女を見送った後、急いで家に帰った。玄関のドアを開けるとすぐにガレージへ走って行き、コーヒーを飲みながら雑誌をめくっていたレイ叔父さんに、一気に一連の出来事をまくし立てた。最初は珍しく興奮している僕に驚いている風だったが、話が進むに連れて、どんどん優しい表情に変わっていった。そして、話し終わって一呼吸ついている僕の頭を撫でながら言った。

「そいつは良かったな。あの曲を知っているなんて、その子はなかなか趣味が良い」

「僕もびっくりしたんだ！ しかも彼女、とつても上手に歌うんだよ」

「可愛い子かい？」

僕は言葉に詰まった。思い返してみると、綺麗な髪を揺らしながらまっすぐに見つめる瞳は、

今までに見たことがないぐらい愛らしかった。可愛らしい淡いブルーのワンピースをあんなに上品に着こなす女の子には出会ったことがなかった。だけど、それを言葉にしようとすると、途端に恥ずかしくなって声が出なくなってしまう。そんな僕を見て、レイ叔父さんは微笑んでいた。

「こいつは良い話だな！ ケイ、なんとしても、その子をモノにするんだぞ」

「え……。モノにするってどういうこと？」

「ケイ。お前はそれでも男か。しっかりするんだよ」

「そんなこと言われても……。初めて出来た友達だから、よくわからないんだ」

「そうか。ふむ……。そうだな。とりあえず、学校で会ったら絶対に挨拶を交わして、できるだけたくさん話すようにするんだ」

「うん、わかった。僕もそうしたい。もっとお話してみたい」

「いいぞ、ケイ。そしたらな。頃合いを見計らって、『今夜、一緒に食事をしないか』って誘ってみるんだ」

「え、そんなのダメだよ」

「なんでだ？」

「父さんや母さんに怒られちゃうんじゃないかな」

「いや、まだ両親に挨拶するのは早いよ」

「挨拶って？」

「とにかく、食事ぐらいもダメなのか？ 悲劇だぜ、そんなの」

「だって、6時には家に帰らないと暗くなっちゃう。みんなそうだよ」

「ああ、ロミオ。どうしてあなたはロミオなの？」

「叔父さん、何言ってるの？」

「紳士たるもの、シェイクスピアぐらいは嗜んでおくんだ」

それからしばらくは、レイ叔父さんによる『ロミオとジュリエット』の一人芝居が上演された。舞台風のおおげさな演出をつけつつ、いまいち話の流れがつかめない僕に、歌いながら解説をした。それがとても滑稽でおかしかったのを覚えている。

唐突に舞台が中断したのは、ガレージと家を繋ぐドアが音を立てて開いたからだ。開けたのは、もちろん父だ。その姿を確認すると、レイ叔父さんはあからさまに苛ついた顔をした。

「レイ。今週末のことで話がある。ちよつと来い」

いつもより父の声が高圧的だったので、僕の心は一瞬で縮んだ。そして、カレンダーを見てようやく納得した。今週末は母の命日だ。毎年、レイ叔父さんと父はこの時期になると険悪になる。命日では、毎年家に関係者を集めてお茶会のようなものをするのだが、どういうわけか、レイ叔父さんはこのお茶会に出席したことはなかった。いつも命日が近くなると、どこかに旅に出るか、当日だけふらりと出かけていた。

「兄貴。今は忙しいんだ。後でもいいか？」

「いや、こちらも時間がない。ケイ、すまないが少しだけレイと話をさせてくれるか？」

そう言われて、僕が首を横に振るはずがなかった。レイ叔父さんは大きく舌打ちをした。

「汚ねえな」

「いいから来るんだ」

レイ叔父さんは深く息をついてから父についていく。二人がドアの向こうに消えた後、くぐもつた会話を聞きながら、僕は声を出さずに少しだけ泣いた。

その頃から、隣国との緊張は更に激しいものとなっていった。テレビでは、いつ戦争が始まってもおかしくないことを延々訴える番組が増えたとし、僕の街では軍用車が道路を走ることが増えた。大人たちは不安が募っていたのかもしれないが、子供心でいえば、特に普段の生活に変化はなかったし、とてつもなく大きい軍用車が街を走っている姿は、心が踊ったりもした。それよりも僕が嫌だったのは、レイ叔父さんの酒を飲む量が、圧倒的に増えたことだった。

酒を飲む量に比例して、父とレイ叔父さんが口論する量も増えた。命日もやはりレイ叔父さんは朝早くからどこかへ出掛け、その日の夜は特別に激しい喧嘩が行われた。

レイ叔父さんと一緒にいられる時間は、どんどん少なくなっていく。隣国との緊張で父もまたいぶストレスがたまっており、ガレージにいたことが父に知られたら、いつも以上に説教をされた。レイ叔父さんも酒を多く飲んでいる日は口数が減り、僕がいても黙っていることが多くなった。話しかけたら優しく返してくれることもあるが、家の前を軍用車が通ったりすると、会話の途中でもガレージを飛び出して行き、大声で悪態をついた。一度はビール瓶を投げつけて、警察に連れて行かれた。全てが変わりつつあった。僕はどうすることもできなかった。

「それでね。レイ叔父さんおかしいんだ。その後はずっと歌いながら、シエクスピアって人の物まねをしてたんだ」

学校ではミシエルと話す機会が増え、楽しかった頃のレイ叔父さんの話を、自分に言い聞かせるように何回もした。ミシエルも楽しそうに聞いてくれて、その笑顔を見ると、心から救われるような気分になった。何も変わりなく、レイ叔父さんも笑って家で待っているような気がした。

「ねえ、私、会ってみたい、その人に」

ミシエルはそう言うと、学校からずっと二人で蹴ってきた石を見下ろして、靴で踏んだ。そして、帰る向きとは反対の方向へ強く蹴った。別れ際に彼女がよくやる『儀式』だ。

「とても素敵な人じゃない」

胸がぎゅつと締め付けられた。突然、衝動がこみ上げてきた。叫びたい。誰かに伝えたい。僕も心からそう思っていることを。ミシエルが言葉にしてくれた、この大事な気持ちを。酔って汚い言葉を叫ぶ叔父さんを思い出して、不意に泣きそうになった。ミシエルが不思議そうにこちらを見る。

「ねえ、今度遊びにおいでよ。ミシエルにもレイ叔父さんに会ってほしいんだ。とても素敵だよ。三人で楽しいことを話そう。一緒にレイ叔父さんの旅の話聞こう」

言葉が勝手に口から出ていた。瞳が勝手にミシエルを見ていた。そこに涙が溜まっていたことに、彼女は気づいただろう。彼女は一瞬驚いた表情を見せたけど、すぐに優しい表情に変わった。そして僕の手を握った。

「とても素敵ね」

彼女はそう言うと、不意に顔を近づけて、一瞬だけ唇を重ねた。時間が止まる。目の前のミシエル。まっすぐの瞳。その瞳が優しく細まり、笑顔になっていく。僕の心臓だけが動いている。

「きつと行くわ。楽しみにしてる」

彼女の口が動く。声が届く。手が僕の頬に触れる。そしてゆっくりと一歩下がった。

「また明日ね」

恥ずかしそうに笑い、彼女は背を向けて歩き出した。しばらくは世界がぼんやりと揺れていたが、やっと現実が戻ってきたころには、彼女の背中は既に遠く、僕の手は壊れた風車みたいに無意識に振られ続けていた。

勢い良くドアを開けると、ソファに座るレイ叔父さんの姿があった。テーブルには琥珀色の酒の瓶、グラス、そしてビール・ジャッキーの欠片。伏せていた目をゆっくりと上げて、こちらを見る。この目だ。叔父さんがこの目をするようになってから、僕はあまり叔父さんと話せなくなっていた。別人のような表情。ずっと別の世界にいる。ずっと僕が存在していないような顔で僕を見る。本当に怖かったけど、この日は違った。ミシエルの言葉が僕を強く支えていた。

「レイ叔父さん！ 今度、ミシエルが遊びに来るって」

自分でも驚く程の明るい声。

「ケイか。騒がしいな。突然どうした？」

「ミシエルと約束したんだ」

「ミシエル？」

レイ叔父さんは眉をひそめる。

「ミシエルだよ。叔父さんが教えてくれた歌を上手に歌う子だよ」

「ああ、そういえばそんなことを言っていたような……」

「叔父さんが、絶対モノにしろって言ってたよね」

別の世界に手を伸ばす。そこにいる叔父さんを探す。楽しかった叔父さんの記憶を思い起こす。

「叔父さん。ミシエルがね、叔父さんのことをとても素敵だと言ってたよ」

「そうか」

「この前、歌いながらお芝居をしたことを話したんだ。あれ、またやってみせてよ」

「そうだな」

叔父さんが深い溜息をつく。心が折れそうになる。もう叔父さんは戻ってこないんじゃないか。そんな気分になってくる。

「叔父さん、次はどこに旅に出るの？ いつになったら僕も連れてってくれるの？」

「いつだろうな」

「ママの故郷にも行くの？」

叔父さんの心が動いた。見つけた。叔父さんが僕を見る。手が届く。

「ケイ。悪いんだが今忙しいんだ。ひとりに……」

「叔父さん。ダメだよ、こっちの世界に戻ってこなくちゃ」

「何を言っているんだ？」

「父さんみたいに、違う世界に行かないで」

「ケイ、俺は兎貴とは……」

「最近ずっと行ってるよ。戻ってきてよ」

「ケイ、そろそろ部屋を出て……」

「『ブルータス！』」

ありったけの声を出した。時が止まる。世界を変える。我慢していた涙が溢れてきた。もう一度叫ぶ。

「『ブルータス、お前もか』」

滲んだ視界の中で、レイ叔父さんが僕を見ている。驚いた表情。空間の音が聞こえる。涙がどンドン溢れてくる。声が震える。堪えて、声を出す。

「ダメだよ、叔父さん。紳士なら、シェイクスピアぐらい嗜んでおかないと」

強張った顔で、精一杯笑って見せた。瞬間、レイ叔父さんの口から息が漏れる。目を閉じて、深く息を吸う。思い切り吐く。

「ケイ、参ったな」

そこにはレイ叔父さんがいた。確かにそこに立っていた。目を細めながら僕を見て笑っている。我慢の限界がきて、僕はレイ叔父さんに駆け寄って抱きついた。力の限り服をつかみ、出せるだ

けの声を出した。

「ケイ、すまなかった」

「叔父さん。怖かった。戻ってこなかったらどうしようかと思つてた。いやだよ、叔父さん。頼むから、怖くならないで」

叔父さんの手が、僕の頭を撫でる。

「ケイ。大丈夫だ。俺はどこへも行かない。例え離れていても、俺はいつだってケイのことを思っているよ。ありがとうな」

レイ叔父さんの言葉は僕の心に染み渡り、また涙を溢れさせる。とても長い時間だった。出せるだけ言葉を吐き出しても、それでも僕の震えはなかなか収まらず、叔父さんは優しい声で、ビーフ・ジャーキーを買つた集落の話をしてくれた。僕がやっと安心して眠りについたので、叔父さんの集落の話が三日目に差し掛かった頃だった。

目覚めると、僕はガレージのソファに横になつていた。窓の外は、朝日で満たされている。埃が舞う音さえ聞こえるような静寂は、僕の胸を騒ぎ立てるには十分な程、緊張感を保つていた。

「レイ叔父さん」

僕は呼びかけてみた。僕の小さな声は、ガレージ内の隅々まで振動させて、壁に反射し、そしてそのエネルギー全てを消費しながら僕の心を震わせた。そのせいで泣きそうになつたが、涙は流れずに顔を強張らせただけだった。

ソファから降りて、立ち上がってみる。止まっている空気をかき回しながら、部屋の端まで移動する。突然、心臓が強く鼓動を打つ。テーブルの上。動悸は、更に早くなる。「ケイへ」と書かれた封筒。そしてその横に乱雑に置かれた新聞紙。そこには、隣国がついに宣戦布告し、その足がかりとして、南の小さな島に軍事侵攻を行なったことを大々的に報じていた。これが、レイ叔父さんに関する最後の記憶だった。

*

風。全身を風に包まれる。風を切る音以外は、聞こえる音といえれば連続的な排気音だけだ。どのくらいの時間が経っただろう。シートに跨がり、背筋を伸ばし、腕を前に突き出す。同じ角度で力を入れ続けている右腕は、もう自分のものだという気がしなかった。いや、右腕だけじゃない。風に負けないように全身で力を入れ続けたため、もう自分の体全ての感覚が麻痺してしまつたように感じる。

*

レイ叔父さんがいなくなつてしばらくの間、僕はずっとガレッジで過ごしていた。必要がなければ外に出なかつたし、学校にも行く気はしなかつた。ミシエルのことは気にはなつたが、それ

でもガレージを離れることは考えられなかった。

食事を運んでくる父とは色々と話した。といつても、レイ叔父さんのことには触れずに、当たり障りのないことばかりだ。それでも、前に比べたらとても優しくなったし、家にいる時間も多くなった。このままずっと、こうやって過ごしても良いな、と心の奥底で密かに思ったりもした。だが、この生活もすぐに終わりがやってくる。

「ケイ、話があるんだ。ちよつといいか？」

「うん、どうしたの？ 父さん」

ある日、食器を下げに来た父がそのままソファに座って話しかけてきた。

「ケイ、学校に行かなくなつて、もうだいたい経つ。恋しくはならないか？」

「そうでもないよ。元々友達も少なかったしね」

あからさまに表情が曇る。

「そうか。まあ……、そうかもしれないな。けどな、やはり学校は行つたほうがいいと思うんだ。それでだな。担任の先生や、小児科の先生とも色々相談したんだが……。このガレージが、お前の将来に悪影響を及ぼす恐れがあるかもしれないので、うん、言い難いんだが……。このガレージを取り壊そうかと思うんだ」

ショックではなかった。真面目な父のことだから、いつか来るだろうとは覚悟していた。

「そうなんだ。うん、父さんがそう思うなら良いんじゃないかな」

父は、目を見開く。僕が反対すると思っていたらしい。

「いいのか？ 絶対に嫌がるんだと思っていた」

「悲しいけど……。けど、父さんが考えてくれたことだから」

僕はそう言うと、大事なものが入っている引き出しから、封筒を取った。それを父に手渡した。その手紙にはこう書かれていた。

ケイへ

お前の父親は立派な男だ。時計を見るととき以外はな。だから、ちゃんと言うことを聞けよ。俺のことを何か言ったり、俺のものに何かしようとしても気にするな。あの人は俺とお前を、心から愛してくれているんだ。だからすることなんだと常に心に刻んでおくんだ。

幸せになれ

そして、兄貴を幸せにしてやってくれ

レイ

手紙を持つ手が震えていた。父のこんな表情を見るのは初めてだった。ゆつくりと手紙を置き、父は僕を抱きしめた。

「ケイ。すまなかった」

「父さん」

父の肩が小刻みに震えていた。全身に父の温もりを感じた。僕の瞳に、唐突に涙が溢れてきた。「レイ叔父さんのこと、愛してた？」

「もちろんだ。どこの世界に、実の弟を嫌う人間がいるんだ」

「父さん、ごめんなさい。ごめんなさい」

「大丈夫だ。ケイは何も悪くないんだ」

二人で泣いた。涙が止まらなかつた。ガレージは変わらずにとても静かだった。

「父さん、レイ叔父さんはママのこと……」

「ケイ。お前のママは、街中の人間から愛されていた。もちろん、レイだって同じように愛していたさ」

「レイ叔父さん、帰ってくるかな」

「もちろんだ。いつかひょっこり帰ってくる。そのときは、また新しいガレージを建てよう」

「うん、約束だよ」

それから父は、震えがなくなるまで僕を抱きしめ続け、レイ叔父さんの昔話をしてくれた。腕に巻いた時計からは、微かに秒針を刻む音が聞こえていた。

*

僕はひとつになっている。イメージだ。エンジンの鼓動、各部を巡る熱く煮えたぎったオイル、

地面をシームレスに蹴り続けるタイヤ。それら全てが、僕の心臓に、血液に、呼吸ひとつひとつにリンクしていた。何処までだろう。流れる風景を感じながら、僕は思った。周囲の全ての物は、線になって凄まじいスピードで後方に流れて行く。もちろん、そんなものをじっと見つめている訳ではない。視線はずっと前方を睨んでいる。だから、感じるだけだ。今僕の横を高速で通り過ぎるのは、一瞬前に前方に位置していたもの。サングラスを通して視界にとらえたもの。想像と経験と、僕の知らないとてつもなく大きい何か。それらが奇妙に混ざったものを、人々は感じながら生きていく。

僕は探し続ける。高速で通り過ぎる過去を眺めながら。彼と同じ景色を見つめながら。僕の人の根元の部分に、もう一度触れるために。その約束を守るために。僕は探し続ける。

小説部門佳作

千ヤボ

夢月 七海

その日、彼女はいつも通りに玄関で姪を迎えた。しかし、姪が持つてきたものを見て、流石に彼女も驚いた。

「おばちゃん！ 見てー！」

姪が幼い顔に無邪気さと妙な自信をたたえて、両手で抱いた鶏を前に出した。

「……………」

彼女は未だに言葉を発せずじまつた。姪は今までも、変な形の石、花火の残骸、たんぼぼの綿毛、虫かごいつぱいの蟬、瓶詰めにしたダンゴ虫など、持ち前の好奇心で様々なものを彼女の一軒家に持ち込んでいたが、これ程大きなものは初めてだった。

「どうしたの、それ」

「ひろった！」

姪の返事は単純な半面、不足している部分が多すぎた。自分の仕事は終わったと言わんばかりに、胸を張る姪にこれ以上の説明を求めることを、彼女は一瞬で諦めた。

どうせ拾うなら犬猫が良かったのと思いつつ、彼女はゆつくりと鶏に近付いた。顔を突かれないように、丁度良い距離で止まる。

鶏は、雪のように真っ白な体で、僅かに羽の先と尾羽に、夜のように黒い部分が混じっていた。鶏の顔で一番目を引くのは、血のように赤く肉厚な鶏冠だ。それが、扇を広げたように後頭部まで達し、同じ性質のものが嘴を挟んで胸元にも涎掛けのように垂れ下がっている。小さいながらも先の鋭い嘴と、四つに分かれた竜の鉤爪のような脚は鮮やかな黄色だった。

薄い黄色の中に浮いた黒い点のような眼を、鶏は忙しなく開閉させながら、周りをきよろぎよろと見回していた。彼女はそんな鶏の様子を観察したまま言う。

「チャボだね、これ」

「チャボ？」

「鶏の種類」

彼女はやつとチャボから目を逸らし、背もたれにゆつくりと体を預けた。

姪は両目に星のような輝きを灯したまま、彼女に尋ねた。

「たまご、産む？」

「産まない。オスだから」

「じゃあ、食べちゃおうか？」

「天然記念物だから、食べたら逮捕される」

「えー」

姪は不満げな声を出して、下を向いた。自然と、その視線はチャボの背中に注がれる。

「タイホされるのは、やだなー」

「そうだね。鶏食べて捕まるのは、馬鹿げているよね」

自らの命運を分ける、そのような会話がされていても、チャボは短い瞬きを繰り返して、首を巡らせ続けるだけだった。

姪は、たった二つの案が却下されたただけだというのに、万事休すという表情で、彼女を見詰めた。

「どうしよう……」

「普通に考えたら、飼い主が見つかるまで預かる、とか」

「そうする？」

「そうしようっか」

彼女は軽い調子で頷いた。チャボをまた外に捨てるのは可哀そうなどという同情の気持ちは全くなく、世間一般のセオリーに従った提案だった。

ずっとチャボを抱いていた姪は、その重さで腕が疲れてきた様子で、一度チャボを持ち直した。

「庭に持っていく？」

「うん」

彼女は姪が頷くを見て、タイヤを回して後ろを向いた。姪は両手がチャボで塞がっているため、

足を蹴るように動かして靴を脱いだ。何もなかった三和土に小さな靴が転がった。

彼女は玄関から真っ直ぐ伸びる廊下を進む。姪はスロープから家へ上がり、ゆっくりと彼女の後ろを歩く。姪が彼女を追い越さないのは、大半の人のように彼女に気を遣っているのではなく、抱いているチャボが逃げないようにと気を付けているからだろう。急に移動を始めたために、チャボの首の動きが先程よりも活発になっていた。チャボの羽毛と姪の服とが擦れる音が、彼女の耳に届く。チャボを家の中に入れるのは抵抗があつたが、外から直接庭に出られる戸は防犯のため固定してしまつたので、仕方ないことだつた。

廊下の左手側に、黄ばんだレースのカーテンに隠された、天井から床までを貫く四枚の窓が見えた。彼女はその窓と直角になる位置で止まり、乱暴にカーテンを開けた。そして臍の辺りに現れた鍵を開け、硝子に両手を付けてゆっくりと左へスライドさせていく。徐々に広がっていく隙間から風が入り、右側のカーテンを揺らした。

姪は彼女が窓をすべて開けるまで我慢出来なかつたのだろう。突然彼女の右に立つと、窓の空いた部分から外に向けて、下からボールを投げるように「それっ！」と勢いよくチャボを放り出した。

急に宙に浮いていたチャボはすぐに羽ばたきを始めた。しかし、もちろん飛び上がることはなく、パラシュートを開いた時のように落下を緩やかにする程度の効果しか得られなかつた。そのまま、チャボは頼りない二本の足で着地して、立ったまま激しく首を回して辺りを窺っている。

「びっくりしてゐるねえ」

「当たり前でしょ。こつちもびっくりしたわ」

姪は満足そうな顔でにやにやと笑い、やつと窓を開けきつた彼女は呆れ顔で言った。

しばらくしてチャボは、ちよこちよここと歩き始めた。灰色混じりの地面を歩くチャボの行く先に、邪魔をするものは何もない。かつてはこの細長く小さな庭も、芝生が敷かれ木も生えていた。しかしこの庭を誰よりも愛していた彼女の父がいなくなつて以来、草木も枯れ果てて、木の根すら残っていない。風雨にさらされたたつた一本の物干し竿が、寂しく立ち尽くすだけである。

胸を張り、足を一步出すと首も出すという鳥類独特の歩き方をしていたチャボは、しばらく進み、庭をぐるりと囲む灰色の無機質なブロック塀にたどり着いて止まった。この塀の向こうは、家の玄関に面した道路になつている。チャボは塀を見上げたまま首を前後左右に揺らしていたのだが、ふと体を屈めると両方の羽をいっぱい広げた。

「あつー！」

驚いた姪が思わず庭へ一步足を出したと同時に、チャボが地面を蹴つて羽を羽ばたかせた。

しかし、飛び上がったのはほんの僅かで、鶏冠すら低めの塀に届かなかつた。

「あー、よかつたー」

また重力に逆らえずに着地したチャボの姿を見て、姪はほつと胸を撫で下ろした。チャボについて色々勝手なことを言っていたが、姪は姪なりにチャボへ愛情を抱いているらしい。一方で彼女は、チャボが逃げなくても逃げなくてもどうでもいいと思つていたため、先程の一部始終を見ても特に何も感じなかつた。

二人が家から黙って見ていると、チャボが再び塀に向かって飛び立った。もちろん、また落ちてしまう。それでも三度飛び、落ちる。チャボは何度も飛んでは落ちるを繰り返した。飛んでも届かないのなら、回れ右をするか左右に方向転換するなどを試せばいいのに、と彼女はチャボを心底馬鹿にして思う。ただ、どこに行っても塀は同じ高さで、飛び越えることは出来ないのだが。

「鳥頭だねえ」

彼女の素直な感想が自然と口から零れていた。

「トリアタマー」

姪は意味を知らないその言葉の響きが気に入ったのか、無意識に口ずさんでいた。

このまま失敗し続けるチャボを見ているも仕方ないと、彼女は自室に戻ることにした。狭い廊下の上で、彼女は滑らかに方向を変える。

ふと、少し進んだ彼女はあることを思い出し、首だけで後ろに振り返った。姪はまだチャボを眺めており、庭からは羽ばたきの音が断続して聞こえる。

「そういえば、今日もお母さん、遅くなる？」

「うん」

姪の母親、つまり彼女の妹のことを尋ねると、姪は前を向いたまま頷いた。

「夕ご飯、なんか食べたいのある？」

「んー、チキン」

姪はまだチャボを食べるのを諦めていないのか。彼女は一瞬嫌な顔をした。

「冷蔵庫にあつたらね」

彼女はそつけなく答え、タイヤを進めた。

翌日、姪は挨拶もせずには彼女の家に上がると、チャボのいる庭へと走った。そして、乱暴に硝子戸を開けた。

丁度チャボは食事中だった。縁側のすぐ下に散らばった生米を、一心不乱に突いている。あまりに力強いため、地面のコンクリートに穴を開けそうな勢いだ。

姪がそのような様子のチャボをしゃがんで見ていると、彼女が自室から出てきた。

「いつの間に帰ったの？」

「おじゃましてまーす」

「言うのが遅い」

姪の気のない返事に、彼女は言葉では怒りながらも力の抜けた口調で言った。姪もそのことに気付いているようで、チャボを見たまま頷いた。

「それよりもこれ」

「なあに？」

彼女が唐突に自分の膝に乗せていた紙の束を姪に突き出した。姪は不思議がりながら、立ち上がり、それを受け取った。

紙には「チャボあずかっています」の大きな文字、彼女が久しぶりに取り出したデジタルカメラで撮ったチャボの写真、連絡先として彼女のパソコンのメールアドレスを、順番に横に並べて印刷されていた。その紙を全部で、五十枚ほど重ねてある。彼女が姪のいない午前中に作ったものだ。平仮名は読める姪は、紙から彼女に目を移した。

「これでチャボの飼い主をさがすの？」

「そう。幼稚園の子に配ったり、帰り道の家のポストに入れといて」

「はい」

満面の笑みで元氣よく手を挙げて、姪は返事をした。こんな風にすれば先生に褒められることを知っているんだろーと、彼女は冷ややかに姪の行動を見る。

姪は自身が座っていた場所の隣に紙の束を整えて置きながら、ふとした調子で口を開いた。

「ねえ、おばちゃん」

「何？」

「なんでおばちゃんちの電話番号とか住所とかが書いていないの？」

「……あんまりこのこと、教えたくないからね……」

彼女は姪から目を逸らして、ぼそりと呟いた。姪はよく聞こえなかったのか、意味が分からないのか、不思議そうな顔を繰り返すだけだった。

自分のことは自分で守らないといけない。彼女がここ数年で強く実感したことだった。外の人が無意識に向けてくる、嫌悪も好奇も同情の目も、等しく彼女を突き刺した。そのため、彼女

は胡桃のように硬い殻の中に籠ることを選んだ。

チャボはまだ米粒を突いている。一時間ほど前にまいたというのに、その勢いは全く衰えない。そのとどまることを知らない食欲に、彼女は小さく溜息をついた。

縁側に腰掛け、足を交互に揺らしていた姪が、再び不思議そうな顔で彼女を見上げた。

「チャボのごはん、お皿に入れてあげないの？」

「私が皿を持って庭に下りられる訳ないでしょ」

「あ、そっか」

彼女が呆れて答えると、姪はあっさりと納得したようでも何でも頷き、何事もないようにチャボの方へ向き直った。

もし先程のやり取りが姪ではなく他の人ならば、彼女の言葉を受け取った後に自分の失態を心から恥じるように、露骨に顔を歪めるのだろう。そう考えると、姪のようにそつけない態度の方が、彼女にとつてむしろ楽だった。

「そんなに気になるんだったら、自分で皿に入れてあげたら？」

「えー、いいよー」

「どうして」

「なんか、めんどーい」

「身も蓋もない返事だね」

姪はテレビか何かで見たのか、若者の口調を真似た。彼女は素直さになぜだか清々しさを

感じていた。

そろそろ自室に戻ろうと彼女が両タイヤに手をかけたその時、何の前触れもなく、チャボが鳴いた。甲高く、はつきりと「コケコッコー」と聞こえたその鳴き声で、一瞬だけ時が止まったように見えた。

「すごいっ！ 鳴いたよ！ チャボが鳴いたよ！ おばちゃん、聞こえたっ？」

「うん。聞こえたよ」

興奮した姪が、頬を上気させて座ったまま体を前に突き出しながら叫んだ。反対に彼女は、無表情で姪を見下ろしていた。

「鳴いてるの、はじめて聞いたよ。おばちゃんも？」

「ううん。この前に二、三回くらい鳴いてたけど」

「えっ！？ じゃあ、あがつてくるお日さまにむかつて？」

姪の頭の中には、アニメなどでよく見かけるような、風見鶏よろしく屋根の上に立ち朝日に向かって鳴く鶏という、確固たるイメージがあるのだろうか。先程よりもさらに頬を染め、前のめりになって彼女に尋ねた。

そんな姪に対して、彼女は苦虫を噛み潰したような顔で言い放った。

「全然。まだ日も昇っていない夜三時ぐらいに、急に鳴き出した」

「えー。そうなのー」

姪は分かりやすくしよんぼりして、チャボに恨みを込めた視線を送った。

彼女は姪ほど落胆していないものの、動物の体内時計は人間のそれよりも遙かに優れていると思つていたため、結局はこんなもんかと肩透かしを食らつた気分だつた。もちろん口に出すわけではないが、この鶏には良い所など一つもないのではと密かに疑つていた。

再び、チャボが鳴いた。空に顔を真つ直ぐに向けて、その小さな喉から出たとは思えないほどの声量だつた。

姪は感心したように「おおっ！」と声を漏らしたが、彼女はこの声のせいで夜中に叩き起こされたのだと思ひ返すと、溜息しか出なかつた。

姪がチャボを拾つて、一週間以上が経つた。しかし、未だに飼い主と名乗る人物からの連絡は来ない。

もしかするとチャボの飼い主は、パソコンを持つていないなどでメールを送れないのかもしれないと、彼女は時々考え、多少申し訳ない気持ちになることはあつた。とはいえ、彼女が新しく自宅の電話番号や住所を載せたチラシを作るつもりなどないのだが。

チャボはその頃には、すっかり彼女の家の庭に馴染んでいた。睡眠時は庭の角に浅く穴を掘つて、そこにはまるようにしている。食事はコンクリートの上に散らばつた米を、全て無くするまで食べ続ける。それから、何の脈絡もなく、昼夜関係なしに大きな声で鳴き出すこともある。それ以外の時間は狭い庭を歩き回つていた。チャボによつて穴が掘られ、足跡があちこちに付けられて、たまにミミズを取ろうとしていいのか地面を突くこともするため、庭は以前よりも荒れ果てていた。

毎日のように庭を手入れしていた父がこれを見たら酷く嘆きそうだと彼女は思ったが、父がいたのはもう十年以上前の出来事のため、そこから感傷に浸ることもなかった。

チャボは時折、初めてこの家に来た日のように、道路に面した塀を飛び越えようと羽ばたくこともある。しかし、その飛距離は全く伸びていなかった。彼女は相変わらず全く塀に届きそうにもないチャボを見て、無駄なことだと分かつていてなぜ？ と首を捻ってしまう。

姪はチャボを眺めることに飽きたのか、庭に下りてチャボを追いかけて走り回ったり、無理矢理捕まえたり、ボールのように下から上へ放り投げたりした。そのような乱暴な扱いにも彼女は何も言わなかったが、姪が「羽毛ぶとんを作るー」と言い出してチャボの羽を引っこ抜いた時は流石に注意した。

走り疲れた姪が縁側に腰掛けて一休みしていると、姪とチャボの追いかけてこをずっと廊下から見ている彼女が、長年の疑問をぶつけてきた。

「動物、好きなの？」

「んー、わかんない」

「え、分かんないの？」

彼女は思わず素っ頓狂な声を上げた。

姪は膝の上で頬杖を突きながら、姪から解放され辺りをきよろきよろ窺いながらそろそろ歩くチャボを見詰めたまま、「うん」と頷いた。

「だって、おうちでペット飼えないし、動物園にも行ったことないんだもん」

「幼稚園の遠足とかでも？」

「うん」

彼女はその答えを意外に感じた。姪の幼稚園の近くには、小さいながらも象やライオンのいる動物園があるはずだった。そこへも行けないのはお金の問題だろうか、彼女は悪い方へと勘繰ってしまう。

「おばちゃんはどーなの？」

「へ？」

唐突に姪が彼女の方へ振り返ってそう尋ねたので、彼女は思いがけず間拔けな声を出した。それから、動物が好きかどうか聞かれたのだと気付いた彼女は、少し考えて答えた。

「今は……たぶん普通」

「フツー、なんだー」

姪は感心したように何度も頷いているが、実際は「フツー」と言いたいだけだろう。

昔の彼女は動物が好きだった。この家でペットを飼った経験も多く、休日になればよく動物園へ足を向け、テレビの動物番組を見たり動物の写真集を買ったりもしていた。しかし、閉じこまるようになってからは、動物の映像や写真も何となく見なくなっていた。彼女自身、どうしてそうなってしまったかはうまく説明出来ないが、おそらく嫉妬心に近いものだろうと、ぼんやり思っていた。動物達は皆、首輪をつけられていても、檻の中に入れられていても、今の彼女よりもずっと自由でいるように見えた。

「おばちゃん、しつてるー？」

「何を？」

「チャボって、すぐくふわふわであつたかいんだよ！」

姪はまるでそれが人類の大発見のように鼻高々で教えてくれたが、彼女はそれに対してどう反応していいか決めかねていた。

「……まあ、生きているし、羽毛だらけだから、そうじゃないの？」

「すつごいんだよ」。だつこしたらお日さまの匂いがしてね、背中にほつぺをつけたら、もぐれちゃうんだよ！ ちよつと、重たいけどね。おばちゃんはチャボをだつこしたことがある？」

「無い」

「じゃあ、こつちにつれてくる？」

心底楽しそうな顔で立ち上がった姪に、彼女は慌てて首を振った。

「いいよ、別に。もし逃げられて、家中荒らされたら、困る」

「ええー、そうなんだー」

珍しく不満そうな顔を作つて、姪はその場に座つた。彼女は妙にチャボの抱き心地にこだわる姪を見て、チャボの羽を抜こうとしていたのを思い出した。

「この前羽毛布団を作ろうとしていたのは、チャボを抱っこするのが好きだから？」

「うん！ あの羽をおふとんにしたら、いつでもボカボカしててね、気持ちよさそうだなーって」
姪は自分がチャボの羽が入つた布団で寝ているのを想像しているのか、うつとりとした表情で

目を閉じた。

「でも、羽をひっこ抜いた時に、チャボはすごい声で叫んでたでしょ？ あれ、人間が髪の毛抜かれた時ぐらい、痛かったと思うよ」

「ふーん」

「あと、羽毛布団は確か、鶏の羽じゃなくて、水鳥の羽を使っていたと思う」

「へえー」

「それから、天然記念物を傷つけても、捕まるんじゃないのかな」

「うへー」

姪は、分かりやすいほど嫌そうな顔をした。

「アクホウモホウ、だよね」

「どこでその言葉を覚えたのよ。あと、たぶん使い方間違ってる」

庭の奥の方にいたチャボは、ゆっくりと移動してほぼ中心まで来ていた。片足を上げたままで立ち止まった瞬間、彼女と目が合い瞬きを繰り返して白く濁った臉を見せた。

「飼い主、現れる気配もないなあ」

「メール来ないの？」

「全く」

「そっかー」

姪は安心しているのか落胆しているのか、判断しにくい中途半端な声色で呟いた。

彼女は一日も早く飼い主がチャボを引き取りに来てほしいと思っていた。余った米粒を与えているために食費が掛かる訳ではないが、夜中の突然の鳴き声には困り果てていた。加えて、もしチャボに何かあっても彼女は庭に下りることが出来ず、そうなたら一大事だと思っていた。曲がりなりにも彼女はチャボを預かっている立場なので、多少だが責任感を持ち始めていた。

しかし、そんな彼女の気持ちと現実とは正反対で、彼女は溜め息とともに愚痴を吐き出した。

「このままで、ずっとチャボを置き続けることになるのかもしれない」

「そうなたっちゃうかもね」

「ん？ 嬉しくないの？」

「はんぶんはんぶん、かな」

「どこまでも直球ね」

包み隠さない笑顔でそう言ってきた姪に、彼女は困ったようにそう言いながらも、姪の素直な性格を内心では気に入っていた。血の繋がった妹という時さえもこちなく感じるのに、いつも無遠慮な姪という時は、不思議と彼女は気が楽になるように感じた。

「チャボって、どこから来たのかなー？」

姪が、ちよこちよここと歩き回るチャボを目で追いながら呟いた。

「幼稚園の帰り道に、鶏を飼ってる家とかなかった？」

「ううん」

「鶏の鳴き声を聞いた、とかは？」

「ない」

「それなら、結構遠くから来たのかもね」

その割にはチャボの姿はあまり汚れていない。彼女はそれを不思議に思いながらも、深い理由を考えなかった。

「とどここ、歩いてきたのかなあ？」

「それは無いんじゃないの？」

「じゃあ、どうやって？」

「例えば……」

暇を持て余していた彼女は、姪の好奇心にできるだけ現実だけに即した形で答えようとした。

「トラックか何かで運んでいる途中で、チャボの入っていた檻が偶然開いて逃げ出してしまった、とか。まあまあありえるかも。そんなに騒ぎになっていないのはおかしいけれどね」

「わかった！ とんできたんだよ、パタパターって！！」

姪は急に縁側の上に立ち上がると、満面の笑みで小鳥のように両手を激しく上下させた。

彼女は、可愛らしいはずの姪の行動を、眉間にはつきりと皺を刻み付けて眺めていた。

「ファンタジーすぎるでしょ」

「ファンタジー？」

初めて聞いた単語に、姪は手の動きをぴたりと止め、小首を傾げて見せた。彼女は姪の問い掛けに、ふと真顔に戻る。

「現実、には、ありえ、ない」

彼女は無機質な声で、しかし一文字一文字を叩き付ける様に言った。

姪は答えが抽象的で分からなかったのか、例えがついていないため想像できなかったのか、不服そうに口を結んで「むうー」という声を発した。

しかし、彼女はその時の姪の顔を見ずに、俯いて自分の「足」をじっと見詰めていた。その表情には、何の感情も塗られていない。悲しみも、悔しさも、怒りも、彼女の中ではすでに過ぎ去っていったもの達となっていた。

彼女からの反応が返ってこないのも、姪も諦めたのだろう。それとも、単にじっとしていることに飽きたのか。姪は縁側から庭へびよんと跳び下りると、素早く子供用のサンダルを履いた。

「まてー！ー！」

彼女が姪の楽しそうな声に驚いて顔を上げると、姪は物干し竿近くを歩いてきたチャボへと両手を精一杯広げて突進していった。不意を突かれたチャボは、慌てて羽ばたきをしながら地面を蹴った。

低いながらも宙へ浮いたチャボの羽が擦れる音と、影踏みをするように大股で走る姪がはしゃいであげた笑い声が重なるのを、彼女は目を閉じて聞いていた。

彼女が自室で型紙を広げていると、玄関の鍵、続けて勢いよく戸の開く音が響いた。

「たっただいまあー」

姪の大声は、一階の一番奥にある彼女の部屋までよく聞こえた。あまりに大きいので、窓硝子がびりびりと震え、彼女は思わずそちらを見た。

姪はリュックサックを背負ったまま、縁側の横にある廊下を走り抜け、勢いそのままに彼女のいる部屋の畳を踏んだ。

「おばちゃん、みいーつけ！」

「別にかくれんぼしている訳じゃないよ」

彼女を指差してけたけたと笑う姪に、彼女は振り返らずにそっけなく言い、作業に戻った。用意した型紙をぬいぐるみ用の柔らかな茶色い布に乗せ、チャコペンで印を付けていく。

姪は慣れないスキップをしながら部屋に入り、彼女が使っている極端に低い机に手を乗せ、彼女の作業を覗き込んだ。

彼女は一瞬、机の上に針や鋏など危険な物がそのまま置かれているのではないのかと、視線を巡らせた。

「おばちゃん、おしごと？」

「そう」

「なに、つくってるの？」

「くまのぬいぐるみ」

「へえー」

姪はしばらく、彼女が手を動かしているのを見詰めていたが、急に何か思いついた様子で、日

の当たつたような顔で彼女を見た。

「ねえねえ、おぼちゃん！ 今度、チャボのぬいぐるみつくつてよ！」

「誰が買うの、それ」

彼女は呆れ顔を見せながらも、チャコペンを布切り鋏に持ち替えて淡々と仕事を続ける。

姪はそのような彼女の冷たい仕打ちにもめげていない様子で、背筋をぴんと張つて、力強く右手を挙げた。

「買いたい！！」

「高いよ、私のぬいぐるみ」

「なんとかする！」

彼女は姪の勢い任せの言葉にとうとう溜め息をついたが、「両親にねだるのよりもましかもしれないと考えを改めた。姪を露骨に誉めたりなどは全くするつもりもないのだが。

「チャボのぬいぐるみはね、本物よりもかわいくて、ふかふかで、いい匂いがして、とことこ歩いたり、コケコッコって鳴いたりもできるんだよ！ さらに！ とぶこともできちゃうんだ！」

「それはもう、ぬいぐるみじゃなくてロボットだよ」

「チャボのロボットつくつて！」

「ロボットを作ることは、できません」

「ええー、ケチー」

姪から見当違いの非難を浴びせられて、彼女はぬいぐるみとロボットの違いを細かく教えよう

かと思つたが、説明が大変そうなうえに姪を納得させる自信もなく、やめてしまった。どうやら姪には、彼女のことを何でも作れる人だと思ひ込んでゐる節がある。この誤解を、いつか妹に解いてもらおうと、彼女は決意した。

その後も、姪は彼女が缺で布を淀みなく切つていくのを眺めていたのだが、すでに飽きてきたのか眠そうな顔を彼女に向けた。

「ねえ、おばちゃん。チャボ、見てきてもいい？」

「いいよ、別に」

姪は先程までの退屈そうな顔を一瞬で消して、「やった！」と小さく跳ねて、縁側へと駆けていった。

彼女は、子供はどうして何でもないようなことにも許可を求めるのだろうかと思ひながら、布を切り終えた。

仮止め用のまち針を用意している時、姪が出すどたばたという足音が聞こえてきた。彼女が怪訝そうに部屋の出口を見ると、姪が滑り込むように入つてきた。

「おばちゃん、おばちゃん、おばちゃん！ たいへん、たいへん！」

姪は慌てて彼女を引つ張つていこうとするが、ストッパーが掛かつてゐるため、びくともしない。「一体どうしたつての……」

「はやく！ はやく！」

やつとストッパーを外した彼女の前に立ち、姪は地団駄を踏みながら手招きする。彼女は洪々

進みだし、焦りと困惑を滲ませた姪は彼女の先を小走りで駆けていく。

すぐさま、姪と彼女は縁側に着いた。

「ほらっ！ 見てっ！」

姪の指差した先に、チャボの姿があつた。今日も、塀に向かつて飛び跳ねている。しかし普段と違うのは、鶏冠さえ塀を越えることが出来なかつた以前と比べて、チャボは両足が塀の上に掛かりそうなくらいまで跳び上がり、宙に浮いている時間も明らかに数日前よりも長くなつていたことだつた。

「どーしよ、おばちゃん。チャボが逃げちゃうよー」

姪が不安そうに眉を下げて、チャボと彼女を見比べた。

彼女は視線を真っ直ぐにチャボへ向けたまま、唇を小さく動かした。

「……」

「え？ おばちゃん、なんか言つた？」

「飛べ、飛べ」

彼女は小声だがはつきりと、そう言つた。姪は目を丸くした。

胸の奥底から、熱いものが込み上がり、彼女の内側を支配した。

「飛べ、飛べ、飛べ」

彼女の声は、チャボが挑戦を繰り返す度に、だんだんと大きくなつていった。

チャボが飛び上がる、また落ちる。ただ、それだけの事だつた。チャボが塀を乗り越えそうで、

乗り越えられない。単純で、もどかしいだけの、意味のない時間、それなのに彼女は目を逸らせない。

「飛べ！ 飛べ！ 飛べ！」

知らず知らず、彼女は叫んでいた。言葉をチャボに投げるかのように、体を勢いよく前のめりにしていた。自分がそこから転げ落ちそうになっていたが、そのようなことは最早どうでも良かった。彼女の世界は、チャボとその前に立ち塞がる塀だけだった。チャボに向けて声を投げることに、彼女は全身を使った。

じりじりと塀の頂点への距離を縮めつつも、チャボは何度も落ちて、何度も飛び上がった。その姿は、酷く不恰好だった。しかし確かに、生命の力強さを感じさせた。

「飛べ！ 飛べ！ 飛べ！」

「とべー！ とべー！」

姪も必死な彼女に感化され、一緒に声を張り上げた。二人で、顔を真っ赤にして喉が痛み出すのも気にせずに叫び続けた。

初めてチャボが塀を飛び越えようとするのを見ても、彼女は何も思わなかった。しかし、あの日の後も飛び続けて、ここまで距離を伸ばしたのかと想像すると、彼女の声に自然と、さらなる力が加わった。

「飛べ！ 飛べ！ 飛べ！」

「とべー！ とんでけー！ とんじゃえー！」

ばさばさと、今までよりも大きな羽ばたきの音が響いた。空気を切り裂きそうなほど乱暴にチャ

ボは短い距離を飛び、その足を塀の端に引つ掛けた。

彼女は、チャボが塀の上に立っているのを見た。堂々と胸を張り、広げたままの両羽は日光を反射して白く輝き、白と黒が混じった尾は凜々しくそびえていた。赤い鶏冠を燃え上がらせて、黄色い宝石のような目で天を睨み、恐竜時代からの名残である鱗に覆われた二本の足で、塀を蹴り再び飛び上がった。そして、向こう側の道路へと消えていった。

チャボが塀に到達した間は、時間に換算すると酷く短いものだろう。しかし彼女の目には、その姿が命そのものの輝きとして、深く深く焼き付けられた。

「……おばちゃん、行っちゃったね」

「うん、行っちゃったね」

姪に話し掛けられて、彼女はやつと体中の力を抜いて深々と座り直した。久しぶりに運動をした後のように、体が熱を持っていた。しかし疲れはあるものの、妙な達成感が心の中を吹き抜けていた。

ぼんやりとした表情で、彼女も姪も何もいなくなった塀の上を眺めていた。

「チャボ、とんだね」

「うん、確かに飛んだね」

「おばちゃん、あれってファンタジーだよね！」

唐突に姪が弾むような大声を出し、彼女を見詰めた。彼女は、ああそんな話もしたなあ、あのやり取りを遠い昔のことのように思いながら、視点を固定したまま、自分に言い聞かせるよう

に呟いた。

「ファンタジー、だったね」

彼女はふと、その上を見上げた。空は柔らかな水色と光で満たされていた。空を見上げるのは何年振りだろうか、彼女は思った。

その日の夕食は鶏の唐揚げだった。

テーブルの上に差し出された料理を見て、姪は目を皿のようにした。

「これ、チャボ？」

彼女は思わず吹き出した。

「まさか」

「ほんとに？ よかったー」

姪は心底ほっとした様子で、箸を手にとった。

「いった、きまーす！」

「いただきます」

二人は手を合わせて、それぞれの皿に乗った唐揚げに箸を伸ばした。まだ出来たての大きな唐揚げは、衣はさくつとして、中は柔らかな歯応えだった。

「おいしいっ！」

「うん。おいしいね」

無我夢中で食事をしている姪に優しい眼差しを向けていた彼女は、ゆつくりと口を開いた。

「今度、動物園でも行こうか？」

「えっ！ いいのっ？」

姪は驚きと喜びの声を上げた。彼女が大きく頷くと、姪は「やったー！」と満面の笑みで箸を持つたまま両手を上げて、椅子の上で小さく飛び跳ねた。

「ね、ね、動物園にはなにがいるの？ 犬？ ねこ？」

「それよりもつとすごいのがいるよ。キリンとか、ライオンとか、象とか」

「すごいっ！ じゃあさ、じゃあさ、動物園にチャボもいるかな？」

姪は星のように眩しく光る瞳を、彼女に向けた。

「いるよ、きつと」

彼女は心の内で、誇らしげに直立して、天を仰ぐチャボの姿を思い描いた。

夢月 七海（むづき ななみ）／法文学部・国際言語文化学科二年次

詩 部 門

詩部門受賞作

存在感

鮎川
みのる

あたり前より前の前

薄暗い僕の足元深くで、

アンモナイトが闊歩する

草花はゆらめき、

みなも
水面が輝き、

虫が、いのちを燃やしている！

小さな存在感、その歯がゆさ、

木偶の坊な僕と、朝方の太陽

立っているだけで

季節が僕を置いて去ってゆく
きらきらと自ら光を放つ女の子にも
うつむいて泣いてる僕にも平等に
太陽の光はふりそそぐのだ
布団のように
カーテンのように
僕をくるんで眠りに誘う
静かに、とても白く咲いている

ただ立っている木偶の坊をも
宇宙は、自身の一部として迎え入れる
じわじわと
じんわりと
あたり前の存在として
僕を照らして
可視光線が生み出す僕の色は、周囲に染み出し、
植物の色が、
街の色が、

僕に染み込む

コンクリートの優しいグレーに、涼しいターコイズブルーの空

朝飯前より前の前

空はしらじらと明けてゆき

プテロサウルスが滑空する

木々はざわめき、

氷が溶けて、

ねこが、少しだけあくびする！

小さな存在感、ダイナミックに

朝方の太陽と、反射する僕

風が僕に体当たりする

詩部門佳作

二十一世紀の
シャットダウン

安里 和幸

油田に嵌まった

高層ビル

高架橋の下の

ホームレスの

あおい錠剤

ディスクは

夜明け前のせみの

占領下

夜通し踊れるなんて

ウソだった。

クーラーボックス詰め

僕の口臭

僕の口臭を

喰ってくれ

美食家の皆さま

何卒宜しく願います。

僕の自意識と

甘ったれを

コーカサスの山脈で

^{はりつけ}
磔にして

ステルス爆撃機で

ついばんでくれ。

僕の性慾に

クズ箱を穿かせておくれ。

僕の

みせかけの不幸

と

確実な不運

を

地球上の

あらゆる民族のあらゆる言語と
あらゆる方言のあらゆる否定詞
で

打ち殺してくれ。

「空は憂愁うれひを含んだ蒼い鈍にび(色)いろ)で…」
なんて誰でも小説に書ける

「がんばれ！」「好きよ！」だなんて

誰でも誰にでも言える

世界中に放送される演説なんて

才能さえあれば

幸運さえあれば

修練さえすれば

誰でもチヨチヨイとしやべれる。
だけど

僕たちのことばは

僕たちの世界は

そんな脆弱^{ヤブ}で

安っぽいモンじゃ

ないはずだ。

たすけてほしいのなら

かわいいガケをのぼらねばならぬ。

救いを探しているのなら

這いずり廻つて

飢えなきやダメだ。

叫ばなきやダメだ。

どつちもできない

僕は消費社会の

大事な 大事な

プラスチック製の

あかい

下敷き

二十一世紀をシャットダウン。

二十一世紀のシャットダウン。

安里 和幸（あさと かずゆき）／法文学部・総合社会システム学科一年次

詩部門佳作

てぶらぶら

上間 美香

うずうずうずめく
はたはたはためく
そらそらあおぞら
チムチムドンドン

からから空つぼザック
うわさ話

時計

カメラ

誰かがススメた音楽

みんな置いてけぼって
ぶらぶらひとりぼっち

お気に入りの花柄ブラウス
クラッシュジーンズ
新しい赤いスニーカー
ガラスのピアス
誰に見せるのでもない

横道小道

きみどり自販機
くるくる洗濯物
ありありマチャークワイ
タンナフアクルー
トントントタン
ミーバイおばさん
コトコトやちむん

原っぱ広場

パタパタ小学生

投げ捨て自転車

だまし絵水たまり

アフリカマイマイ

ボサノバにーにー

しけしけ古本

まどろみのら猫

あの子に見せたい

あいつと笑いたい

それもいいけど

今日だけは

まかまかひみつ

ぶらぶらひとりぼっち

「いいね！」

風が微笑む

「ツイト」

小鳥がさえずる
らららパレード！

てぶらぶら

わたしのために

ほんの少しの

てぶらぶら

下を向いてる間

逃してしまった

笑い声

夏の匂い

風のシルク

木の葉のダンス

夕焼けジュース

両手いっぱい
かき集めるため

上間 美香（うえま みか）／法文学部・国際言語文化学科四年次

詩部門佳作

虹の歌

外田 さし

有刺鉄線に絡まる風は

夏を帯びている

金網に結ばれたリボンに

彼らは

なにを託したのだろう

眩しく はためいている

まだ 生まれた場所も知らなかった頃
彼女の頬の皺を眺めながら聴いた

唄^{しわが}れたあの歌で
もう一度遊^{あそ}ぼう

虹よ 虹よ

いらぬものも

宝物も

切れてしまえ

雨を降らせて下さい神様

彼女たちの生まれた時を

転がり続けて

今は何の世^よなのだろう

老いた皮膚に刻まれた歴史

涙がなぞったその最先端で

私たちは 何を見るのだろう

途絶えたあの歌で

もう一度笑おう

いらぬものも
宝物も

有刺鉄線が裂く怒号も
金網が拒む哀願も

等しく濡らしていく雨を
神様に願おう

それが上がった空には
きつと 虹が浮かぶだろう
すべての断裂を越えて
きつと 虹が浮かぶだろう

夏の風に託した声は
新しく かがやいて

のーじ のーじ
いららんぼーん
たからんぼーん
あみふりよーやー
ていんがなさー

引用：うるま市勝連平安名のわらべ歌「のーじのーじ」

外田 さし（ほかだ さし）／法文学部・国際言語文化学科二年次

選 評

選評

第七回琉球大学びぶりお文学賞 小説部門選評

喜納 育江

今年のびぶりお文学賞小説部門でも、とても質の高い作品が最終選考に残り、選考委員たちを悩ませた。このレベルになると、「選ぶ」プロセスにはそれぞれの選考委員の主観がかなり反映されてくる。当然のことながら、意見が分かれることもあるが、結果として「良い」作品かどうかの評価は、選考委員がその作品を「好き」かどうかで決まることが多い。

私は「美しい」作品が好きである。「美しさ」というのはまた主観と偏見に満ちた言い方ではあるが、私の場合は、表現するときの言葉の選び方に「美しさ」を感じる人が多い。表現の選択には書き手の洞察力が如実に反映される。風景や情景の描写、心の動きの描写、そして登場人物が語る言葉など、表現の際の言葉の選択に、人間の普遍的なテーマに対する書き手の非凡な洞察力が見えると、私はわりと素直に感動する。

その意味で、受賞作の「初七日」は秀でていた。物語の着想や構成も優れていたが、見事だったのは、日常の風景を描く脱日常的な言葉の選択だった。「そっけなく汚い」「冷蔵庫、「レトルトな」生活、こぼれた発泡酒に仰向けになった髪の毛が濡れて行くさまに、「髪の毛の中にまで進軍する発泡酒ほどことなく退廃的だ」――軽妙でユーモラスな表現が続く。しかし、その言葉の背後には、大切な友人の死という受け止められないほどの重い経験がある。その出来事の重さを丁寧に包み込めるだけの丈夫さが、皮膜のように薄く軽いそれらの言葉には「幸いにも」伴っていたように思う。洞察力に優れた書き手である。これからも様々なテーマや表現を

開拓していつてほしい。

一方、佳作に選ばれた三作品も、それぞれに個性的な魅力があった。「ロール」は、惜しくも入賞を逃した前作の続編と読めたが、完成度は前作より格段に高かった。許容度の高い主人公（サトウ君）が奔放な「ある」に振り回されつつ彼女のすべてを受容するというストーリーだが、最後まで本心が読めない「ある」のエキセントリックさ、リアルさを感じられない存在感に魅力を感じるか否かは読者の好みも分かれるところだろう。ただ、この作品の読者は、苛立たしきであれ、もどかしきであれ、可笑しきであれ、確実にこの物語に引き込まれる。こうした良い意味で姑息な「トラップ」に、この書き手の筆力の高さを感じられる。

また、「ブルータスの歌」も、非常に精密に練られたストーリーで、私自身の好みで言えばかなり「好き」の部類に入る作品だった。外国の登場人物設定にリアリティを伴わせるのは難しい。その難度を克服するというよりは、巧みにすり抜けているような印象で、これも技術としては有効かと納得した。ただ、エンディングが少し唐突な気がしたので、語りのフィニッシュへ向けた周到さのようなものについては今後考えてみる余地があるかもしれない。

「チャボ」も、日常にチャボが入ってくることによつて、動物の生命力を通して「生きる」というテーマを表現する筆者の洞察に好感が持てる作品だった。肉体と生命について主人公と姪との間で交わされる対話も生き生きとして良かったと思つたが、幼い姪の発する言葉には、幼さを強調しようとするあまりか、ややリアルさが欠けている印象もあった。個人的には飛び去つたチャボの行く末が気になるところだが、結果を深追いないエンディングも、ある意味でこの書き手の潔さと言えるかもしれない。

他にも最終選考に残つた作品には私なりの感想を持つたので、それぞれ以下に簡潔に述べてみる。

まず、「通学路」だが、「歩く」という行為をゲームの攻略のように描いているところは面白いと思つた。ただ、「深み」を敢えて拒絶しているのだろうかと思わせるほど軽い書きぶりで、後味の残らない印象だったの

で、今回は作品の存在意義についても考えさせられるような作品を書いてみてほしい。次に、「言の葉協奏曲」であるが、「音楽を書く」という行為、「なぜ」に「分らない」と答える意味、深淵なテーマをていねいに掘り下げていく筆力に好感をおぼえた。実際の評論の言葉がもう少し熟達していればなお良かったと思う。「潮騒の傷」は、「沖繩」や「沖繩戦」をめぐる、日本と沖繩、沖繩の中でも熟年世代と若者世代の言語感覚の差異に切り込んだ感性の鋭さを評価したい。もう少し分量があれば、そのテーマもより充実させることができたかもしれない。「やまびこソング」は、言葉をしていねいに紡いでいるところは評価したいが、語り手が理子から茅原に変化するところの流れややまびこの登場などがあまり腑に落ちず、今ひとつストーリーの核心が捉えられなかった。「ガソリンスタンド」は、ガソリンスタンドで働く若者の目を通して俗っぽい世の中の姿と、その若者と世代の異なる同僚たちとのコミュニケーションが生き生きと描かれていて面白かった。しかし、文体も表現もスムーズに受け入れられる一方、読後にこれといって残るものがないような気もした。次の作品では、作品を通して伝えるメッセージは何かということも追求してみてもどうだろうか。

最後に、「八時十一分の空」だが、複数の登場人物それぞれの「八時十一分」のストーリーを時刻や「月」といったモチーフに収斂させながらつなげているところは面白いと思ったが、その表現手法で何を伝えたかったのかについてはわかりにくいと感じた。

びぶりお文学賞も七回目にして、とうとう応募者の枠が琉球大学を越えて他大学まで広がった。大学生という人生の時期に、自分が何をどこまで表現できるのか、びぶりお文学賞が、文学という表現を通じたそんな挑戦に向けて、切磋琢磨し合える仲間と出会える「場」としても増々充実していくなら、それはこの賞の運営に関わっている（関わってきた）人々にとっても何にも代え難い喜びである。

第七回琉球大学びぶりお文学賞 小説部門選評

豊かな文学的資質を感じさせる作品群

大城 貞俊

今回の応募作は一七編。応募の枠を県内のすべての大学へと門戸を広げたせいも昨年より五編も上回った。応募作の多くに豊かな文学的資質を感じさせられた。嬉しいことである。慎重な審議を重ねて、受賞作に「初七日」（東恩納るり）、佳作には「チャボ」（夢月七海）、「ロール」（植竹亜紀子）、「ブルータスの歌」（追田祐樹）の三編を選んだ。

受賞作の「初七日」は、愛の形を幽霊（死んだ彼女）との奇妙な関係の中で描いた作品で、その方法は斬新であった。愛や死や友情は、若い学生諸君にとつてはいずれも大きなテーマであろうが、それをよく小説の形で処理している。ややもするとこれらのテーマは観念的になり過ぎるのだが具体的な現実の世界で踏みとどまっている。「こんな本を思い出す」と切り出す構成にも文学的センスを感じる。「模様替えおばさん」の登場など、様々な仕掛けや小道具が多義的に暗示されて作品に広がりや深みをもたらしている。物語の結末部分で示される「今日から、初七日が始まる」という構成や語彙の豊かさは将来への大きな可能性をも感じさせてくれた。

佳作は三作品。「チャボ」は、チャボが塀を飛び越える姿に登場人物の「彼女」が自分自身の境遇を重ねた作品のように思われる。その着想や意図は明快であるが、チャボの努力も「彼女」の病もやや平板に語られ過ぎて感動の拠点が弱いように思われた。「彼女」や「姪」を語る「語り手」の視線に深さがあればさらに優れた作品になったであろう。「ロール」の作者の文章力は、応募者の中でも抜きん出ていた。作品を客観視する

もう一人の視点をも有して冷静に作品を構成している。「ミヤ」と「ある」の二人は、これからもこのような人生を繰り返すのだろうか、そういう人物を造型したかったのだと理解した。「ブルータスの歌」は確かに一つの作品世界が作られていて好印象を持った。主人公である「ぼく」以外の登場人物もよく描き分けていて、それぞれの個性が際立っている。「レイ叔父さん」やビジネスマンの「父」を主人公にして、もう一つの物語が紡げるのではないかと思わせるほどで、このような作品にこそ文学作品の豊かさもあるはずだ。

その他の作品では、「言の葉協奏曲」「潮騒の傷」「やまびこソング」などが特に印象深かった。「言の葉協奏曲」は音楽を言葉にする苦悩を描いたものだが、文章も構成も最後までブレることなく若々しい感性を感じた作品だ。「潮騒の傷」は沖繩の地に来て、沖繩の風土や歴史や文化を背景に俳句を作っていくたいとする男の物語だ。俳句に対する知識の深さが随所に見られて感心した。この知識がよく作品にも馴染んでいる。終末部分で男が本を投げ捨てる行為は、言葉にする以前の感動を大切にしようとすることの暗示のようにも思えて興味深かった。「やまびこソング」の作者にも、大きな可能性を感じた。言葉をつなぐ「ヤコ」という山彦の神様を登場させたアイディアは抜群だ。「私」と「裕二」の関係も素直に描かれていて構成や文章にも力を感じた。ここに挙げた三作品は、私の中では入選作品と大きな差はないように思っている。「通学路」「ガソリンスタンド」「八時十一分の空」などの作品も今一步の努力で入選作のレベルに到達するはずだ。

入選作を含め、今回の応募作の特徴は、まず第一に誤字や脱字も少なく、文章に大きな破綻もなかった。しっかりと推敲がなされているということだろう。また作品の題材とした分野でのそれぞれの作者の造詣の深さにも感心した。さらに、応募者のすべてに上質な文学的センスを感じて頼もしかった。

次回の応募のために留意することをあげれば、作品全体のインパクトをもう少し強化して欲しい。読者としての新鮮な発見や驚きにやや乏しかった。世代を超え、時間や空間を超えて相手を感動させる作品を創造するには、作者自身も読者となつて感動することも大切だろう。そして、感動は言葉だけでなく、登場人物それぞれ

れが紡ぎだす物語もが有していることを、今一度、考えてみることも必要かもしれない。学生諸君のさらなる精進を期待したい。

(おおしろ さだとし／教育学部教授)

第七回琉球大学びぶりお文学賞 小説部門選評

大野 隆之

本文学賞の選考は初めて体験したのだが、なかなか大変であった。一つは作品のタイプが多様で、たとえばフィギュアスケートと空手の型を同時に審査しているような感じになること。美しさにも様々なタイプがある。さらにどの候補作もそれぞれに魅力と欠点を抱えており、これが優れていると簡単には決められないこと。まさに紙一重の差であり、順位付けは非常に厳しい行為であった。

一方「おきなわ文学賞」の小説部門の場合、一〇代(高校生以下)の応募作の大半が、いわゆるライトノベルであるのに対し、さすが大学生、若者の中にいまなお「文学」という領域が存在していることを確認できたのは喜びであった。

受賞作「初七日」は中でも文学らしい作品であった。私の個人的な見解では余りにもストーリーの展開が少ないこと、あくまでも孤独な幻想なので、もうひとりの友人と会ったらその時点で崩れてしまう(終わってしまう)世界であること、結局は「夢オチ」に過ぎないこと、などいくつも不満はあったが、他の選考委員が賞賛する

ように、そういった欠点を補ってあまりあるような、表現力と感受性がある。作者はおそらく数多くの文学作品を読み込んでおり、かつそれらを自分のものにしていて、語彙や、文章は群を抜いていた。かつてドナルドキーンは日本文学の特徴として、感性に優れ、構成力を弱点とすると述べたことがあるが、まさにいい意味でも悪い意味でも文学的といつてよい。ストーリーという意味では小説が減んでもマンガなり映像表現なりに受け継がれて行くものであるが、純粋に言語だけで構築される感性の世界、といった意味では、小説や詩といった言語表現のみに可能なことである。その意味で、この作品を受賞作とするのに異論はなかった。

佳作の中で私が非常に惹かれたのは「ロール」であった。この作品はストーリーと文体のバランスが優れており、いい意味のエンターテインメント性も備えた作品である。読み始めた時はいくらなんでもここまで純粹なやつはいないだろうと、二人の主人公達に違和感を持ったが、それは私が汚れた社会に適應して他人にあわせて生きているからである、などと感ずるほど、徐々に引き込んでいく手際は見事であり、しまいに二人を応援したくなるような気持ちにさせる。結末直前までバッドエンディングもありうるという可能性を残したのもスリリングであった。受賞作とは方向の全く違う作品であるが、それぞれ甲乙つけ難い水準にあると思われる。

「ブルータスの歌」は非常に物語性の高い、独特の世界観を伴った作品である。ひとりひとりの作中人物のキャラクターは個性的であり、空想の世界でありながら強い実在感を感じさせる。惜しいのはこの作品の構想に対して、制限枚数が十分ではなかったということである。戦争という大掛かりな背景の中で、叔父が人が変わったようになるためにはもう少し分量が必要であった。主人公の小さな恋も十分に育つことが出来ず、全体的に長編の予告編のような印象を持った。私の感覚だとこの作品は最低原稿用紙で二〇〇枚は必要だった気がする。「チャボ」は非常にバランスのとれた短編小説である。母親らの存在感がないという批判もあったが、逆に背景を思い切りきりすてて、叔母と姪との閉ざされた世界を描いたため、リアリズムでありながらファンタジーのような印象を与える魅力的な世界をつくりあげた。たまたその反面、ラストのチャボの旅立ちがあまりにも予

定調的であり、きちんと整いすぎた部屋のように、若いエネルギーが感じにくい作品になってしまった。選考後に聞けば、実は今回佳作以上受賞者の中の最年少のようである。同じ作者の大学生を視点人物とするような作品をぜひ読んでみたい気がする。

最初に述べた通り、この他の作品にも多くの魅力があった。

「八時十一分の空」は多視点並立型の興味深い作品であったが、このタイプの作品は最終章で今まで分かれていた物語がひとつになることが肝要である。そこをうまく処理できなかったのが残念であった。また恋を打ち明ける大学生にはリアリティーを感じたが、事務に誠意を見せる大学教授には全くリアリティーがなかった（笑）。「ガソリンスタンド」は沖縄の文学で滅多に見えない私小説風の商品である。それが事実であるかは別として、等身大の大学生の感覚を生かした作品は数少ないのである。その点は魅力的であったが、アルバイトがあまりにも平和裏に終わってしまい、インパクトに欠ける作品となった。繰り返すが背伸びをしない自分視点自体は非常に効果的である。

「潮騒の傷」の作者には大きな可能性を感じた。たとえば詩のようなジャンルでは時として才能だけで傑作が発生する場合があるが、一定の息の長さを必要とする小説というジャンルはどうしてもある程度の経験を積む必要がある。この作品の作者には非常なセンスを感じ、足りないのは経験だけだと思われる。次回作を期待したい。

（おおの たかゆき／沖縄国際大学教授）

分からないことの深さ

大城 貞俊

詩とは何だろう。ある詩人は「言」と「寺」の漢字の作りから、「寺の言葉」「魂のこもった言葉」だとした。もちろん、その定義で詩の世界を一括して表現することは困難だろう。しかし、妙に腑に落ちる感慨を持った時期があった。

今年も、若い学生諸君の創出した詩の世界に触れる機会に恵まれた。やはりそれぞれに多様な詩の定義があるのだろう。多様な世界が展開されていて興味深かった。新鮮な比喩表現や擬人化された風景の物語、繰り返される日常の中の驚きや新しい発見、あるいは揺れ動く青春の夢と恋情など、いずれも好感がもてた。詩を楽しむことは日々を豊かにすることに繋がる。そのような感慨をも覚えた。

しかし、一方で詩を簡単に作れると思っではいけない。このことも自戒の一つにしていいようにも思う。詩の言葉を相手の心に届けるには、言葉を選ぶ側の思索の深さ、言葉を解体して自明なものを揺さぶる力もが必要となってくる。いたずらに答えを手に入れることなく、沈黙の時間、考え続けることの決意、分からないこととの深さを示すことも詩を誕生させる大切な契機になる。簡単に手に入れた言葉は簡単に消えていく。詩の言葉は、いわく言い表しがたい世界にたじろぐことなく向き合う忍耐力が、共感を得る言葉となり、射程の強い言葉を獲得することにも繋がるように思う。

今年の応募作品は六三篇。この中から慎重な審議を経て、受賞作は「存在感（鮎川みのる）」を、佳作は三篇「て

ぶらぶら」(上間美香)、「二十一世紀のシャットダウン」(安里和幸)、「虹の歌」(外田さし)を選んだ。

受賞作の「存在感」は、自らの思考の体験を普遍的な世界にまで押し上げた詩の世界の広がりや深さがまずいい。紡ぎだされる言葉は思考の深さに比例することを示した作品の一例だと思う。もちろん、そんな世界中でも言葉の拠点は自らの「存在」だ。自らの生の鼓動を引き寄せて、存在の不思議な無力感と充足感というアンビバレンツな世界を言葉にしている。「分らない自分」を見つめることによって自らを解放する力にもなり得ているように思う。最後の三行「小さな存在感、ダイナミックに／朝方の太陽と反射する僕／風が僕に体当たりする」が、なんとも爽やかで印象に残るフレーズだ。

佳作の「てぶらぶら」も、独特の世界を持つている。独りぼっちになる寂しさと同時にこのことよって手に入る自由と解放感、その言い表しがたい世界を「てぶらぶら」という自らの生み出した言葉で表現した。決して言葉遊びに墮していない悲しみもある。聖俗交わる混濁した世界を浄化する不思議なまじない言葉が「てぶらぶら」だ。実に効果的で生きている。思わず口ずさみたくなる言葉だ。「二十一世紀のシャットダウン」は、「僕たちのことば」と「僕たちの世界」を凝視したことから生まれた詩だ。簡単には妥協しない若者の反骨精神とみずみずしい感性に溢れている。個の世界から、社会を、世界を、そしてことばをも疑う作者の現在はいきと絶望を乗り越える力をも獲得することが出来るはずだ。「虹の歌」も自らを取り巻く世界を理解しようとした作品である。私たちの住む世界は、遠い日々の暮らしからの積み重ねで営まれている。この時間の流れの中で何が生まれ何が消え去ったか。作者の視線には土地の神々や世界の平和までもが射程にいれられた悠久さを感じられる。

その他、入選作以外に印象に残った作品は「不特定多数を現代病がすくう」「ある糸満漁師の帰還」「げんしを見つめる瞳」「カラフルモノクロ」「四季讃風」などがある。「不特定多数を現代病がすくう」の評価は、私の中ではかなり高かった。言葉と格闘している。聖なるものから下卑たものまで作者の抱える世界は広く、自

明なものを揺さぶる作者の意欲には共感するところが大きかった。「ある糸満漁師の帰還」は、作者の物語を創る想像力に感心した。冒頭の「名付け得ぬ大洋と／アダンが踊る砂浜を／鋭い白の船跡で／縫いとしていく、小さなサバニ」は、息を呑むような鮮烈な比喩だと思ふ。「げんしを見つめる瞳」は、神と人間の罪を逆転させた発想でユニークであった。「カラフルモノクロ」は新しい手法の恋愛詩で興味深かった。タイトルも象徴的である。「四季讃風」は応募作品の中でも特異な作品で、漢文調の文体はリズム感のある硬質な詩世界を確実に造型していて凛とした潔い世界に好感を持った。

今年から「琉球大学びぶりお文学賞」は応募枠を広げ、県内の他大学へも呼びかけられた。このこともあってか作品の応募は昨年の2倍を上回った。文学的センスに秀でている作品も数多く、嬉しいことであった。詩の言葉を紡ぐことは、自らの人生を豊かに紡ぐことにも繋がるはずだ。来年度はさらに今年以上の応募を期待し、学生諸君の健闘を祈る。

(おおしろ さだとし／教育学部教授)

第七回琉球大学びぶりお文学賞 詩部門選評

松原 敏夫

今回から県内学生全体に応募を拡大したので、それなりに期待した。詩は言語表現芸術の開花が求められると同時にそこに作者の内部や心を表出することで読者の心をうつものである。技巧と作者の意図が一致してい

ればいい味わいがでて読者に訴えてくる。学生の言語感性のそういう表現が多様多彩に果実する作品を期待した。しかし、ちよつと氣勢をそがれる感じとなった。全体的にいえることであるが、詩をあまり読んでいない、詩をこういうものだという先入観で書いているな、という印象があつた。詩はいろんな書き方が許される。本来的な書き方というものはない。だから自由である。そこを楽しむように書いていけばいいはずなのだ。また日常的な小さなものにこだわっていいが、こだわつたままではいけない。

(受賞作)

鮎川みのる『存在感』(法文学部 国際言語文化学科 四年次)

あたりまえの卑小な存在や日常の事物と対峙して言葉を拾うようにして、それが深化して自然や宇宙と交感していく姿になつてゐる。こういう感覚は詩を発想するときにとでも大事なことだ。些細なことに眼をむけることだなにかを発見する味わいがある。詩とはそういうものだ。世界の発見のよろこびだ。眼をむけることが言葉となつていく。だからこそ感覚を開放できている。ことばの流れが賛歌にたどりつく喜びがでていて、読んでいて気持ちがいい。

「小さな存在感、ダイナミックに／朝方の太陽と、反射する僕／風が僕に体当たりする」この体当たりする風は気持ちのいい風であらう。

(佳作)

安里和幸『二十一世紀のシャットダウン』(法文学部 総合社会システム学科 一年次)

「詩は青春の文学である」とするなら、この詩はまさにそういう種類の作品であらう。やるせないリアリズムと暗示的表現がからみあつてゐる。世界や社会に向かつて、アルコール、自虐的、自己否定、批評性を対峙

させ、メッセージのある言葉を生み出している。作者の根底にあるのは若者の現在を取り入れ少しでも希望を持つとする姿勢である。

「飢えなきやダメだ。／叫ばなきやダメだ。／どっちもできない」を革新する。これが「シャットダウン」というメッセージであろう。

上間美香『てぶらぶら』（法文学部 国際言語文化学科 四年次）

ことばが展開する出来映えがよかった。語感をつかんで、言葉を楽しめるコツを持っているひとも思う。心的な部分と光景が交互に作用しあって行をつくっている。言語の歩行感と情動が一致している。なにか束縛する現実や生活感、空虚感を軽妙に歌いながら解放感をたすことに成功している。「てぶらぶら」とは意味的だが、開放のリズムであろうか。

外田さし『虹の歌』（法文学部 国際言語文化学科 二年次）

全般的に社会意識のない作品が多かったが、この詩は沖繩の現実に対峙するところから発している。沖繩の現実にかかわろうとした姿勢は評価できる。ただギャップを感じながら自意識を現実に適応させようとする弱さはやはり物足りない。詩の言葉は同化しながら違和をすくいあげていくときに言葉が生き生きしてくる。その取り出しがあればもっとよかった。

（まつばら としお／外部選考委員・山之口獏賞受賞詩人）

第七回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

第七回琉球大学びぶりお文学賞は、平成二十五年五月一日から十月三十一日までの間募集し、小説部門は十七編、詩部門は六十三編の応募があった。所属ごとの内訳は次のとおり。

【小説部門】 法文学部Ⅱ九編、理学部Ⅱ二編、工学部Ⅱ一編、農学部Ⅱ一編、人文社会科学研究所Ⅱ一編、理学研究科Ⅱ一編、他大学Ⅱ二編。

【詩部門】 法文学部Ⅱ二十八編、教育学部Ⅱ五編、理学部Ⅱ二編、工学部Ⅱ三編、医学部Ⅱ一編、人文社会科学研究所Ⅱ二編、理工学研究科Ⅱ一編、他大学Ⅱ二十一編。

また、学年ごとの内訳は次のとおりであった。

【小説部門】 一年次Ⅱ三編、二年次Ⅱ五編、三年次Ⅱ一編、四年次Ⅱ六編、院生Ⅱ二編。

【詩部門】 一年次Ⅱ八編、二年次Ⅱ十二編、三年次Ⅱ八編、四年次Ⅱ十六編、六年次Ⅱ一編、高専四年Ⅱ十五編、院生Ⅱ三編。

選考会議は、小説部門は十二月五日、詩部門は十二月十二日にそれぞれ行い、既発表のとおり、受賞作と佳作を選出した。これらの作品を含め、応募作についての選評は、前回の選考委員による選評を読んでほしい。

平成十九年に創設された本文学賞も第七回を数え、今年度からは応募資格を本学の学生と限定せず、沖縄県内の大学・大学院・高専等の学生へ拡大して実施した。この文学賞が、沖縄に在する若者の内なる言語力、表現力、創造力を刺激し、文学・文化活動の活性化の一助となることを期待する。

(附属図書館職員)

第7回 琉球大学びぶりお文学賞

応募締切
発表予定

平成25年10月31日
平成25年12月上旬

【小説部門】

- ・受賞作1編 = 海外旅行(20万円以内)またはノート型パソコン(同額)
- ・佳作3編 = 1編につき図書カード5万円分
- ※海外旅行を選択した受賞学生には研修内容を、「海外見聞記」として書くことを義務づける。

【詩部門】

- ・受賞作1編 = 1編につき図書カード5万円分
- ・佳作2編 = 1編につき図書カード1万円分

選考委員

小説部門／喜納育江(国際沖縄研究所教授)、大城貞俊(教育学部教授)、大野隆之(沖縄国際大学教授)
詩部門／大城貞俊(教育学部教授)、松原敏夫(山之口顕賞受賞詩人)

応募要領

- ジャンルは小説・詩とする。
- 日本語で書かれた作品とする。
- 応募資格

・沖縄県内の大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生(高等専門学校の場合は、本科4年次以上)及び大学院生とする。

・ただし、過去において受賞となった作品の作者は、同一部門に応募することはできない。

●応募方法

・小説部門に関しては、1編400字詰め原稿用紙50枚以内、1人1編とする。ただし詩部門と小説部門の重複応募は認める。

・詩部門に関しては、1編400字詰め原稿用紙5枚以内、1人3編までの応募とする。

・応募原稿は未発表作品に限る。(同人誌などにすでに発表したものは選考の対象外とする。)

・小説・詩両部門とも、原稿は、A4判横長用紙にタテ書き、1ページ30字×40行、10ポイントの文字で印字する。

・必ず通し番号(ページ番号)を入れて右肩を閉じる。

・必ず1枚目にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。

・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名(本名)、学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年を付記する。ホームページの投稿用フォームをダウンロードして貼り付ける形でも構わない。(個人情報応募に関する連絡以外には使用しない)

・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールでの送付(メール添付での応募の場合、PDF形式とする)のみ受け付ける。

・応募原稿は返却しない。

今年度より応募対象拡大!



●送付先および問い合わせ

お待ちしておりますにゃん

琉球大学附属図書館情報サービス課情報サービス企画係

電話 098-895-8167

mail: kikaku@lib.u-ryukyuu.ac.jp

第七回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇一四年三月十七日

編集 琉球大学附属図書館

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

印刷 株式会社 近代美術
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地

第7回 琉球大学「びぶりお文学賞」

小説部門

初七日

東恩納るり

詩部門

存在感

鮎川みのる

佳作

ロール

植竹亜紀子

ブルータスの歌

迫田祐樹

チャボ

夢月七海

佳作

二十一世紀のシャットダウン

安里和幸

てぶらぷら

上間美香

虹の歌

外田さし